

愛知学院大学

語研紀要

第48巻 第1号 (通巻49号)

論 文

「生まれる」の意味分析

—韓国語태어나다 [taeconada] と比較して—

..... 李 澤 熊 (3)

Do-It-Yourself Websites for University Teachers

..... R. Jeffrey BLAIR (31)

翻 訳

メアリ・ブラッドン「最後の舞台出演」

..... 松 岡 光 治 (55)

『中国漢字文化大観』〈第九章 (二)〉 (齊冲天)

..... 趙 晴 (77)

中華人民共和国独占禁止法

..... 李 智 基・加 藤 幸 英 (101)

書 評

Critique of a Research Study:

Does Reading-While-Listening Enhance Students' Reading Fluency?

Preliminary Results from School Experiments in Rural Uganda

..... Heather DOIRON (123)

2023年1月

愛知学院大学語学研究所

目 次

論 文

「生まれる」の意味分析
—韓国語태어나다 [taeeonada] と比較して—
.....李 澤 熊 (3)

Do-It-Yourself Websites for University Teachers
.....R. Jeffrey BLAIR (31)

翻 訳

メアリ・ブラッドン「最後の舞台出演」
.....松 岡 光 治 (55)

『中国漢字文化大観』〈第九章 (二)〉(齊冲天)
.....趙 晴 (77)

中華人民共和国独占禁止法
.....李 智 基・加 藤 幸 英 (101)

書 評

Critique of a Research Study:
Does Reading-While-Listening Enhance Students' Reading Fluency?
Preliminary Results from School Experiments in Rural Uganda
..... Heather DOIRON (123)

と例(3)に関しては태어나다 [taeconada] は対応せず、代わりに関連語(탄생하다 [tansaenghada]: 誕生する、나오다 [naoda]: 出てくる、생기다 [saenggida]: 生じる)が対応する。このように、日本語の「生まれる」は意味拡張がかなり進んでいる多義語であるのに対して、韓国語の태어나다 [taeconada] は、意味拡張がほとんど進んでおらず、基本的な意味用法にとどまっていると考えられる。

以上を踏まえて、本稿では、日本語の「生まれる」が持つ複数の意味を記述し、それぞれの複数の意味が韓国語とどのような対応関係にあるかを明らかにすることによって、韓国語教育及び日本語教育における効果的な学習指導法の可能性を探る。

具体的な考察に入る前に、次節では、多義語の基本的な性質や位置付け、分析方法などについて先行研究を踏まえて概観する。また、「生まれる」の多義性を明らかにする前提として、多義語分析の課題とその解決のために援用する概念について、先行研究に基づき簡略に説明する。

2. 多義語の分析について

2.1. 多義語の位置付け

国広(1982:97)は、多義語(polysemic word)を「同一の音形に、意味的に何らかの関連を持つふたつ以上の意味が結び付いている語を言う」と、また、「同音異義語」を「同一の音形に、意味的に関連を持たないふたつ以上の意味が存在する場合に生じるふたつ以上の語のことである」と定義している。ただし、「多義語」と「同音異義語」を区別する「意味的な関連の有無」という基準は決して明確なものではなく、「同音異義と多義の現象は、本質的に連続しているのであり、境界を定めようとするのがそもそも無理なことである」と考えるべきである(p. 108)

と述べている。つまり、国広（1982）は同音異義語、多義語、単義語（単一の意義素の文脈的変容）のそれぞれの境界を明確にすることは困難であり、連続的であるという立場を取っている。この連続性⁽¹⁾と関連することとして、朧山（2021）では意味と漢字表記の関係は、「同音異義語（例：くも（雲・蜘蛛）」「多義的別義と漢字表記が対応（例：さめる（冷める・覚める・褪める）」「ゆれ（例：カタイ（固い・硬い・堅い）」の3通りの場合が考えられると指摘している。ところで、「うまれる」には、「生」「産」という2種類の漢字表記があるが、「生まれたて／産まれたての赤ちゃん」のように「うまれる」の意味の違い（多義的別義）に厳密に対応しているとは言えない場合と、「記録が生まれる／？産まれる」のように、多義的別義と漢字表記が対応する場合がありますと考えられる。以上を踏まえて、本稿では漢字表記の相違に依拠する区分は行わず、あくまでも意味の相違にのみ注目するという立場で、分析を行う。

以下では、多義語の定義や位置付けなどについて、基本的に上記の立場に立って考察を進めていく。

2.2. 多義語分析の課題

多義語の意味分析をめぐることは、従来から様々な分析方法が提案されているが、日本語の例を中心に詳細な記述・検討がなされているものとして朧山の一連の研究があげられる。朧山（2001, 2002, 2019, 2020, 2021）は、多義語の分析において明らかにしなければならないこと、即ち、多義語分析の課題として、少なくとも以下の1)～4)が考えられると述べている。

- 1) 何らかの程度の自立性を有する複数の意味（多義的別義）の認定
- 2) プロトタイプの意味の認定
- 3) 複数の意味の相互関係の明示
- 4) 複数の意味すべてを統括するモデル・枠組みの解明

本稿では、上記の課題のうち、主に3)と4)の課題について詳しく検討する。

まず、3)の課題について、初山 (2001:33) は「多義語の実際の分析を通して、複数の意味の間には一般にどのような種類の関連が認められるかということ を明らかにすることも重要な課題である」とし、「メタファー、シネクドキー、メトニミーという3種の比喩が、複数の意味の関連付けに重要な役割を果たすと考える」と述べている。以上を踏まえて、多義語の複数の意味の関連性を比喩の観点から考察する。なお、3種の比喩の定義・性質・種類をめぐるには諸説あるが、ここでは、初山・深田 (2003:76-87)、初山 (2010:35-52, 2020:97-124) の記述を参考に

メタファー (隠喩)：2つの事物・概念の何らかの類似性に基づいて、一方の事物・概念を表す形式を用いて、他方の事物・概念を表すという比喩。

「パンの耳」：パンの端のほうの部分→器官としての「耳」

「息子にお荷物扱われる」：負担となる対象→運搬するものとしての「荷物」

シネクドキー (提喩)：より一般的な意味をもつ形式を用いて、より特殊な意味を表す、あるいは逆により特殊な意味をもつ形式を用いて、より一般的な意味を表す比喩。なお、より一般的な意味とは、相対的に外延が大きい (指示範囲が広い) ということであり、より特殊な意味とは、外延が小さい (指示範囲が狭い) ということである。
「(病院で) 石がたまっている」：結石・胆石→(岩石や鉱石などを含む) 石一般

「お茶でもしませんか」：飲み物一般→本来の「茶」

メトニミー (換喩)：2つの事物の外界における隣接性、さらに広く

2つの事物・概念の思考内、概念上の関連性に基づいて、一方の事物・概念を表す形式を用いて、他方の事物・概念を表す比喩。

「空間における隣接」：自転車を漕ぐ→「自転車」と「ペダル」

「時間上の隣接性」：料理に箸をつける→「食べ物に箸を接触させる」と「実際に食べる」

次に、4)の課題について、靱山(2020:132)は、3)をさらに発展させたものであるとし、「多義語の複数の意味の相互関係を明示することに加えて、個々の意味に共通する意味(スキーマ的意味)を抽出すること、個々の意味を構成要素として含むフレームを明示すること、多義構造全体における個々の意味の位置付けを示すこと等が課題となる」と述べている。本稿では、「送る」の多義構造を記述するにあたり、靱山(2021)が提案する「統合モデル」が有効であると考え、以下では、考察対象とする語の多義構造を明らかにする前提として、「統合モデル」について簡単に概観する。

靱山(2021:239-240)は、「統合モデル」について、以下のように説明している。

この統合モデルは、放射状ネットワークモデル⁽²⁾、スキーマティック・

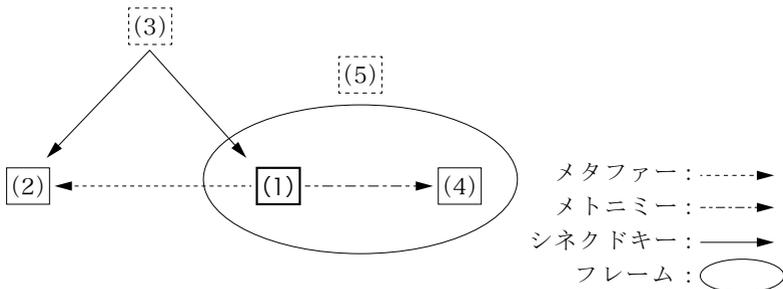


図1 統合モデル(靱山(2021:239))

ネットワークモデル、フレームに基づくモデル⁽³⁾を統合したものであり、3つのモデルの優れた点はそのまま継承し、さらにこれらを統合することによって、ある多義語の複数の意味すべてを包括的に記述・統合し、多義構造を明示することができるモデルである。(中略) 図1は、ある多義語(以下、Wとする)が以下のような性質を持つことを示している。なお、自立性が高い意味について確認すると、個々の母語話者において定着度が高く、かつ言語共同体において慣習性が高い意味のことである。

- 1) Wは(局所的スキーマ(3)およびフレーム(5)を含めて)(1)～(5)の5つの意味を持つ。
- 2) 意味(1)がWのプロトタイプの意味である。
- 3) 意味(2)は、意味(1)からメタファーに基づき拡張したものである。
- 4) 従って、意味(1)と意味(2)に共通する意味(スキーマ)として意味(3)が抽出できる。このことより、意味(3)と意味(1)および(2)はシネクドキーの関係である。
- 5) 意味(4)は、意味(1)からメトニミーに基づき拡張したものである。
- 6) 楕円は、意味(1)と意味(4)を構成要素とするフレーム(意味(5))である。

本稿では、以上の「統合モデル」に基づき、「生まれる」の多義構造を明らかにした上で、韓国語의 태어나다 [taeconada]⁽⁵⁾との対応関係について考察する。

3. 「生まれる」の意味分析

3.1. 分析の手順

本節では、以上の多義語分析の基本的な考え方と方法を踏まえて、「生まれる」の意味分析の手順について述べる。

【1】用例の収集

各コーパス、ウェブ検索エンジンなどを利用して様々なジャンルの用例を可能な限り多く収集し、使用頻度、使用領域、共起関係などを考慮してデータを整理する。

【2】多義語の分析

収集した用例に基づき、各語の意味用法を試行錯誤的かつボトムアップ的に検討し、先行研究の記述が不十分な（未着手の、あるいはアップデートが必要な意味用法がある）場合は、修正・追記する。最終的に、上述した多義語の分析の手法に基づき、各語の精緻な意味記述を行う。

【3】語の意味記述

語の意味特徴及び意味に関わる特性は〈 〉で括って示す。

【4】本稿で使用したコーパス及びウェブ検索エンジン

本稿で使用したコーパス及びウェブ検索エンジンについて提示する。なお、引用例は、以下のコーパス及びウェブ検索エンジンを参考にして作った作例である。

- 1) 『現代日本語書き言葉均衡コーパス (BCCWJ)』 (<https://chunagon.ninjal.ac.jp/>)
- 2) Google (<http://www.google.co.jp/>)
- 3) 『NINJAL-LWP for BCCWJ (NLB)』 (<http://nlb.ninjal.ac.jp/>)
- 4) 『NINJAL-LWP for TWC (NLT)』 (<http://corpus.tsukuba.ac.jp/>)
- 5) Yahoo (<http://www.yahoo.co.jp/>)

以上の分析の手順に従い、「生まれる」の意味を分析した結果、以下のように下位分類することができた。

表1 「生まれる」の意味分類

意味分類		主な共起語
大分類	小分類	
生命の誕生		人間、赤ちゃん、娘、子、女の子、息子、孫、奇形児、障害児、子犬、子猫、牛、稚魚、生物、命、生命
立場・地位の獲得		人間、女、職人の子供、日本人、長男、霊能者、次男、皇子、一員、奴隸、嫡子、末っ子
人物・組織の出現		歴史的人物、ヒーロー、女性監督、億万長者、英雄、失業者、犠牲者、独裁者、難民、自衛隊、組合、国連
物の出現	商品・製品	商品、製品、品種、酒、ワイン
	場所・地域	店、空間、ハリウッド、地球、星、(都として)京都、古代ギリシャ
	創作物	名曲、傑作、名作、作品、音楽、映画、ドラマ
事柄の出現	関係	人間関係、絆、対立、交流、亀裂、対立、競争
	状況・事態	状況、変化、現象、ニーズ、需要、課題、問題、責任
	結果	格差、効果、結果、成果、利益、損失
	社会・文化	文化、社会、文明、風習、歴史、習慣
	言語・記録	表現、記録、会話、意味、伝説、新記録
	機会・時間	機会、チャンス、時間、余裕、選択肢、出会い
	技術・能力	技術、強さ、力、応用力、説得力
	制度・仕組み	制度、仕組み、産業、ビジネス、雇用、治療法
	学問	民俗学、社会学、心理学、理論、主義、理念、宗教
	活動	動き、活動、行動、発見
性向・特性	違い、メリット、多様性、客観性	
心的現象の出現	気持ち	安心感、不信任感、一体感、感情、疑問、団結心、自信、感覚、誤解、信頼、笑顔、感動、意欲、愛、笑い
	思考・知恵	仲間意識、集団意識、発想、思想、考え方、考え、工夫、知恵、アイデア、発想、価値観、世界観

以下では、以上の分類結果を踏まえて、多義語分析の方法に基づき、様々なレベルの意味の自立性（定着度）を有する「生まれる」について、スキーマ的意味・フレームを含めて、23の意味を認定し、考察を行う。

3.2. 「生まれる」の意味⁽⁶⁾

意味⁽⁷⁾ (1) 【生命の誕生】：〈人や動物の子が〉〈母体や卵から出て〉〈生の営みを始めるようになる〉

- (4) あの夫婦の間に、待望の女の子が生まれた。
- (5) うちの猫に、子猫が3匹生まれた。
- (6) 赤ちゃんが無事に産まれてほっとしたのも束の間、毎日の世話で明け暮れている。

意味1は、人や動物の子が、母体の胎内や卵から出てきて（または、卵から雛などがかえって）、個体としての生命活動を始めるようになることを表す。ただし、以下の例のように、生命といっても、動物の（体の）部位の出現や体に現れる現象、植物については使えない。

- (7) a × 歯【毛・尻尾】が生まれる（○生える）。
b × しわ【にきび】が生まれる（○できる）。
- (8) a × 草が生まれる（○生える）。
b × 種【実】が生まれる（○できる）。

意味1の統語上の特徴として、一般的に基本文型は「〈人・動物〉が〈人（のところ）・動物〉に生まれる」となるが、実際の使用場面においては、「～に～が」という語順の方が自然な場合が多い。⁽⁸⁾

- (9) a ? [子犬が] [うちの飼い犬に] 生まれた。
b ○ [うちの飼い犬に] [子犬が] 生まれた。

なお、漢字表記であるが、出産時やその直後の時点に注目して言う場合は「産」を使うことが多い。

意味 (2) 【立場・地位の獲得】：〈人が〉ある家柄・立場などの子として
 〈生の営みを始めるようになる〉

- (10) 彼は、北の果ての小さな村で、農民の子として生まれた。
 (11) 「日本人に生まれてよかったと感じる瞬間」についてアンケート調査を行った。
 (12) 1685年に音楽一家に生まれたバッハは、音楽の父と称されている。

意味1と意味2は、共に「人が生の営みを始めるようになる」ということを表す場合に用いられるが、意味1は「誕生」そのものに注目する場合に用いられるのに対して、意味2は（人が誕生すると同時に必然的に備わる）何らかの「立場・地位」に注目する場合に用いられる。つまり、この2つの意味は、時間上の隣接性（同時関係）が問題となっており、メトニミーによって意味拡張が成り立っていると考えられる。なお、これらの意味は下に示すように「人間の出生」というフレーム内に位置付けることができる。つまり、「誕生」というところ（構成要素）に注目する場合は意味1となり、「立場・地位」というところに注目する場合は意味2となる（焦点化の違い）。

意味 (3)：〈人が誕生し、（と同時に）何らかの立場・地位を獲得し、
 生の営みを始めるようになる〉

（意味1と意味2を構成要素とする「出生」のフレーム）

なお、「立場・地位」というのは、生まれつき獲得されるものに限られる（例 (13b)）。また、特徴的な「立場・地位」でない場合は使いにくい（例 (14b)）。

- (13) a ?彼は、弁護士として生まれた。
 b ○彼は、弁護士の息子として生まれた。

- (14) a ? 私は、赤ちゃんとして生まれた。
 b ○私は、日本最小の赤ちゃんとして生まれた。

意味 (4) 【人物・組織の出現】：〈それまで存在しなかった人物や組織が〉
 〈何かがきっかけ・基盤となって〉〈出現する〉

- (15) 日本のスポーツ界に、また一人、新たなヒーローが生まれた。
 (16) 現在も、世界のあちこちで難民が生まれ続けている。
 (17) 現在の国際連合が生まれたのは第二次世界大戦直後のことである。

意味 1 は、人が個体としての生命活動を始めるようになる、つまり、(生理学的)「出生」そのものを表すが、意味 4 は、それまで存在しなかった(価値・特徴を有する)人物や組織が、何かがきっかけ・基盤となって出現することを表す。ただし、いずれも「人が新たに出現する」という点では共通している。つまり、意味 4 は意味 1 からメタファーによって意味拡張が起きていると考えられる。

意味 (5) (スキーマ的意味)：〈人が〉〈新たに出現する〉(意味 1 と意味 4 のスキーマ)

なお、意味 4 における〈それまで存在しなかった人物〉というのは、何らかの価値・特徴を有することが前提となるため、特筆すべき場合でないといふにくい(例 (18a))。また、〈何かがきっかけ・基盤となる〉ということから、単なる出現には使いにくい(例 (19a))。

- (18) a ? 中学生が生まれた。
 b ○スーパー中学生が生まれた。
 (19) a ? 友達が生まれる (○できる)。
 b ○喜びや悔しさなど様々な経験を共有することで、真の友達が

生まれる。

意味 (6) 【物の出現】(スキーマ的意味) : 〈それまで存在しなかったものが〉〈何かがかぎっかけ・基盤となって〉〈出現する〉(意味6-1～意味6-3のスキーマ)

意味4は、それまで存在しなかった人物や組織が、新たに出現することを表すが、意味6はそれまで存在しなかった物が、新たに出現することを表す。なお、この意味6は、〈商品・製品〉〈場所・地域〉〈創作物〉というように、大きく3つの意味に下位分類できる。以下、具体例を示しておく。

意味 (6-1) 【商品・製品】 : 〈それまで存在しなかった商品・製品が〉〈何かがかぎっかけ・基盤となって〉〈出現する〉

(20) この医薬品は、産学共同研究から生まれたものである。

(21) こちらの製品は、女性のお客様の強い要望で生まれたものです。

意味 (6-2) 【場所・地域】 : 〈それまで存在しなかった場所・地域が〉〈何かがかぎっかけ・基盤となって〉〈出現する〉

(22) 生まれたばかりの星のことを、「原始星」と言う。

(23) 約6000年前に、メソポタミアに最初の都市が生まれたと言われている。

意味 (6-3) 【創作物】 : 〈それまで存在しなかった創作物が〉〈何かがかぎっかけ・基盤となって〉〈出現する〉

(24) このアルバムには、昭和の時代に生まれた名曲の数々が収録されています。

(25) 文豪が愛し、数々の名作が生まれた温泉宿を巡る。

なお、「コンビニ」のような一般的なもの（建物）でも、それまで当該の地域・範囲に存在しなかったものであれば、使うことができる（例（26b））。また、単なる生産（量産）には使いにくい（例（27））。

(26) a ?家の隣に、コンビニが生まれた（○できた）。

b ○日本にコンビニが生まれたのは、1970年代だそうさ。

(27) ?この食品工場では、1日5千個の弁当が生まれて（○生産されて【作られて】）いる。

ところで、意味6は意味4からメタファーによって意味拡張していると考えられる。つまり、両者からは〈ある対象が新たに出現する〉という共通の意味を抽出できるということである。なお、意味4と意味6の相違点は、生まれる対象が〈人〉か〈物〉かという点である。

意味（7）（スキーマ的意味）：〈ある対象が〉〈新たに出現する〉（意味4と意味6のスキーマ）

意味（8）【**事柄の出現**】（スキーマ的意味）：〈それまで存在しなかった事柄が〉〈何かがかきかけ・基盤となって〉〈出現する〉（意味8-1～意味8-11のスキーマ）

意味6は、それまで存在しなかったもの（具体物）が、新たに出現することを表すが、意味8はそれまで存在しなかった事柄（抽象物）が、新たに生じることを表す。なお、この意味8は、〈関係〉〈状況・事態〉〈結果〉〈社会・文化〉〈言語・記録〉〈機会・時間〉〈技術・能力〉〈制度・仕組み〉〈学問〉〈活動〉〈性向・特性〉というように、大きく11の意味に下位分類できる。以下、具体例を示しておく。

意味 (8-1) 【関係】：〈それまで存在しなかった関係が〉〈何かがきっかけ・
基盤となって〉〈出現する〉

- (28) 日頃から、チームのメンバーと密にコミュニケーションを図ること
で、信頼関係が生まれる。
- (29) 会社が成長し従業員が増えてくると、労使間あるいは従業員間で
意見の衝突や対立が生まれることもある。

意味 (8-2) 【状況・事態】：〈それまで存在しなかった状況・事態が〉〈何
かがきっかけ・基盤となって〉〈出現する〉

- (30) 新型コロナウイルスの大流行でワークスタイルや教育に大きな変
化が生まれた。
- (31) 家事労働を外部委託できる仕組みを作れば、経済に新たな需要が
生まれることは十分期待できる。

意味 (8-3) 【結果】：〈それまで存在しなかった結果が〉〈何かがきっかけ・
基盤となって〉〈出現する〉

- (32) 親の経済力の違いにより、子どもの教育にも格差が生まれてしま
っている。
- (33) お互いの事業を組み合わせると相乗効果が生まれる可能性が高く
なる。

意味 (8-4) 【社会・文化】：〈それまで存在しなかった社会・文化が〉〈何
かがきっかけ・基盤となって〉〈出現する〉

- (34) 人と人が触れ合うところに新しい文化が生まれる。
- (35) 科学技術の進歩によって人間の新しい生活習慣が生まれる。

意味 (8-5) 【言語・記録】：〈それまで存在しなかった言語・記録が〉〈何がきっかけ・基盤となって〉〈出現する〉

- (36) 男子の砲丸投げで世界新記録が生まれた。
- (37) インターネットの発達によって、次々と新しいコミュニケーションが生まれている。

意味 (8-6) 【機会・時間】：〈それまで存在しなかった機会・時間が〉〈何がきっかけ・基盤となって〉〈出現する〉

- (38) 家事を効率化させると自由な時間が生まれるだけでなく、心にも余裕ができる。
- (39) 読書を通して新しい出会いが生まれる。
- (40) 行政のデジタル化によって、新たなビジネスチャンスが生まれる。

意味 (8-7) 【技術・能力】：〈それまで存在しなかった技術・能力が〉〈何がきっかけ・基盤となって〉〈出現する〉

- (41) 名古屋大学との共同研究で生まれた特許技術を用いて、ついに商品化に成功しました。
- (42) 基礎を固めることによって真の学力が身に付き、応用力が生まれる。

意味 (8-8) 【制度・仕組み】：〈それまで存在しなかった制度・仕組みが〉〈何がきっかけ・基盤となって〉〈出現する〉

- (43) グローバル化の影響で、製造業が海外に拠点を移してしまい、国内で新規の雇用が生まれにくくなっている。
- (44) 情報技術の進展に伴い、有益な情報と人を結びつけることによって、産業界では次々と新たなビジネスが生まれている。
- (45) この研究を通して、認知症の新たな治療法が生まれることが期待される。

意味 (8-9) 【学問】：〈それまで存在しなかった学問が〉〈何かがかきかけ・
基盤となって〉〈出現する〉

(46) 相対性理論が生まれる前は、ニュートンの絶対時間が常識とされていた。

(47) 本講義では、日本に民俗学が生まれた経緯について論じる。

意味 (8-10) 【活動】：〈それまで存在しなかった活動が〉〈何かがかきかけ・
基盤となって〉〈出現する〉

(48) この度新しい国際ボランティア組織が発足し、多様な民間活動が生まれることが期待される。

(49) 日常生活の素朴な疑問から新しい発見が生まれる。

意味 (8-11) 【性向・特性】：〈それまで存在しなかった性向・特性が〉〈何かがかきかけ・
基盤となって〉〈出現する〉

(50) 様々な国の人々との関わりや触れ合いから多様性が生まれます。

(51) 年齢によって、働くことに対する意識の違いが生まれる理由について考察する。

ところで、意味 8 は意味 6 からメタファーによって意味拡張していると考えられる。つまり、両者からは〈ある対象が新たに出現する〉という共通の意味を抽出できるということである（スキーマ的意味・意味 (7)）。なお、意味 6 と意味 8 の相違点は、生まれる対象が〈具体物〉か〈抽象物〉かという点である。なお、この意味 8 は、何かがかきかけ・基盤となって生じる場合に使われることから、単なる出現には使いにくい（例 (52a)）。また、新たに生じる場合に用いられることから、日常的に繰り返し起こる出来事には使いにくい（例 (53a)）。

- (52) a ?急用が生まれた (○できた)。
 b ○観光開発によって、新たな雇用が生まれた。
- (53) a ×家の前の交差点で、また交通事故が生まれた (○起きた)。
 b ○自動運転システムの導入によって、新しい種類の交通事故が生まれることが予想されている。

意味 (9) 【心的現象の出現】(スキーマ的意味) : 〈心的現象が〉〈人の心に〉〈出現する〉(意味9-1~意味9-2のスキーマ)

意味8は、それまで存在しなかった事柄が、世の中(社会)に新たに出現することを表すが、意味9は人間の心的現象が心の中に出現することを表している。なお、この意味9は、〈気持ち〉〈思考・知恵〉というように、大きく2つの意味に下位分類できる。以下、具体例を示しておく。

意味 (9-1) 【気持ち】 : 〈気持ちが〉〈人の心に〉〈出現する〉

- (54) 子育てが一段落したことで、日々の生活に少しずつ余裕が生まれてきました。
- (55) この慈善活動を通じて、貧困に苦しんでいる多くの子供たちに笑顔が生まれることを願っている。
- (56) ここまで立て続けに不祥事が起きると、国民に不満や不信感が生まれても不思議ではない。

意味 (9-2) 【思考・知恵】 : 〈思考・知恵が〉〈人の心に〉〈出現する〉

- (57) 業務体制を見直したことで、現場に様々な知恵や工夫が生まれています。
- (58) 発想力や想像力は、様々な体験を積み重ねることによって生まれてくる。

(59) このアイデアは、東日本大震災の辛い経験から生まれたものである。

ところで、意味9は意味8からメタファーによって意味拡張していると考えられる。つまり、両者からは〈ある対象が新たに出現する〉という共通の意味を抽出できるということである（スキーマ的意味・意味(7)）。なお、意味9の統語上の特徴として、一般的に基本文型は「〈心情・考え〉が〈人（の心）〉に生まれる」となるが、実際の使用場面においては、「～に～が」という語順の方が自然な場合が多い（例（60b））。また、心的現象の発生は、具体的な日時を表す言葉とは共起しにくい（例（61a））。

(60) a ? [不満や不信感が] [国民に] 生まれた。

b ○ [国民に] [不満や不信感が] 生まれた。

(61) a ? 10月5日に、夫に対して不信感が生まれた。

b ○私が妊娠した時から、夫に対して不信感が生まれた。

3.3. 多義構造

以上、様々なレベルの意味の自立性（定着度）を有する「生まれる」について、スキーマ的意味・フレームを含めて、23の意味を認定し、分析を行った。また、複数の意味間の関連性については比喩の観点から説明した。

表2 「生まれる」の意味（多義的別儀）

意味(1)：〈人や動物の子が〉〈母体や卵から出て〉〈生の営みを始めるようになる〉
意味(2)：〈人が〉〈ある家柄・立場などの子として〉〈生の営みを始めるようになる〉
意味(3)：〈人が誕生し、（と同時に）何らかの立場・地位を獲得し、生の営みを始めるようになる〉（意味1と意味2を構成要素とする「出生」のフレーム）
意味(4)：〈それまで存在しなかった人物や組織が〉〈何かがきっかけ・基盤となって〉〈出現する〉

意味 (5) (スキーマの意味) : 〈人が〉〈新たに出現する〉 (意味1と意味4のスキーマ)
意味 (6) (スキーマの意味) : 〈それまで存在しなかったものが〉〈何かがきっかけ・基盤となつて〉〈出現する〉 (意味6-1～意味6-3のスキーマ) 意味 (6-1) : 〈それまで存在しなかった商品・製品が〉〈何かがきっかけ・基盤となつて〉〈出現する〉 意味 (6-2) : 〈それまで存在しなかった場所・地域が〉〈何かがきっかけ・基盤となつて〉〈出現する〉 意味 (6-3) : 〈それまで存在しなかった創作物が〉〈何かがきっかけ・基盤となつて〉〈出現する〉
意味 (7) (スキーマの意味) : 〈ある対象が〉〈新たに出現する〉 (意味4と意味6のスキーマ)
意味 (8) (スキーマの意味) : 〈それまで存在しなかった事柄が〉〈何かがきっかけ・基盤となつて〉〈出現する〉 (意味8-1～意味8-11のスキーマ) 意味 (8-1) : 〈それまで存在しなかった関係が〉〈何かがきっかけ・基盤となつて〉〈出現する〉 意味 (8-2) : 〈それまで存在しなかった状況・事態が〉〈何かがきっかけ・基盤となつて〉〈出現する〉 意味 (8-3) : 〈それまで存在しなかった結果が〉〈何かがきっかけ・基盤となつて〉〈出現する〉 意味 (8-4) : 〈それまで存在しなかった社会・文化が〉〈何かがきっかけ・基盤となつて〉〈出現する〉 意味 (8-5) : 〈それまで存在しなかった言語・記録が〉〈何かがきっかけ・基盤となつて〉〈出現する〉 意味 (8-6) : 〈それまで存在しなかった機会・時間が〉〈何かがきっかけ・基盤となつて〉〈出現する〉 意味 (8-7) : 〈それまで存在しなかった技術・能力が〉〈何かがきっかけ・基盤となつて〉〈出現する〉 意味 (8-8) : 〈それまで存在しなかった制度・仕組みが〉〈何かがきっかけ・基盤となつて〉〈出現する〉 意味 (8-9) : 〈それまで存在しなかった学問が〉〈何かがきっかけ・基盤となつて〉〈出現する〉 意味 (8-10) : 〈それまで存在しなかった活動が〉〈何かがきっかけ・基盤となつて〉〈出現する〉 意味 (8-11) : 〈それまで存在しなかった性向・特性が〉〈何かがきっかけ・基盤となつて〉〈出現する〉
意味 (9) (スキーマの意味) : 〈心的現象が〉〈人の心に〉〈出現する〉 (意味9-1～意味9-2のスキーマ) 意味 (9-1) : 〈気持ち〉〈人の心に〉〈出現する〉 意味 (9-2) : 〈思考・知恵〉〈人の心に〉〈出現する〉

以上の分析結果に基づくと、「生まれる」の多義構造は次のように示すことができる。

以下、図2の「生まれる」の多義構造の表記について、簡略に説明をする。

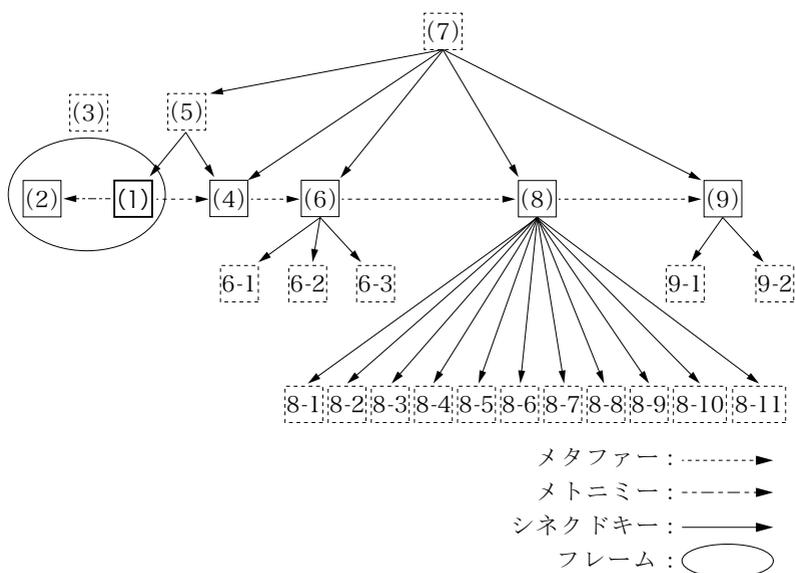


図2 「生まれる」の多義構造

- (a) 「生まれる」はスキーマ的意味(意味5、6、7、8、9)・フレーム(意味3)を含めて、23の意味を持つ。
- (b) 「生まれる」のプロトタイプ的意味は、意味1となる。
- (c) 楕円で囲まれた意味1と意味2はメトニミーの関係にあり、意味3は意味1と意味2を構成要素とするフレームとなる。
- (d) 意味1と意味4はメタファーの関係にあり、スキーマ的意味として意味5を抽出することができる。
- (e) 意味4と意味6はメタファーの関係にあり、スキーマ的意味として意味7を抽出することができる。
- (f) 意味6と意味6-1～6-3はシネクドキーの関係にある。
- (g) 意味6と意味8はメタファーの関係にあり、スキーマ的意味として意味7を抽出することができる。
- (h) 意味8と意味8-1～8-11はシネクドキーの関係にある。

- (i) 意味 8 と意味 9 はメタファーの関係にあり、スキーマ的意味として意味 7 を抽出することができる。
- (j) 意味 9 と意味 9-1 及び意味 9-2 はシネクドキーの関係にある。
- (k) 意味 7 と意味 5 はシネクドキーの関係にある。つまり、意味 7 は、意味 5 よりさらに高次のスキーマ（スーパースキーマ）であるということになる。
- (l) 各意味の自立性（定着度）について、最も自立性の高い意味 1 は、太線の実線の四角で囲って示される。また、意味 2、4、6、8、9 は相当程度の自立性を有しており、実線の四角で囲って示される。さらに、意味 3、5、6-1～6-3、7、8-1～8-11、9-1、9-2 の自立性は相対的に劣っており、点線の四角で囲って示される。

4. 「生まれる」と태어나다 [taeonada] の対応関係について

本節では、日本語の動詞「生まれる」に関する以上の分析結果に基づき、韓国語の태어나다 [taeonada] との意味の対応関係について検討する。

以上の分析結果から分かるように、「生まれる」は多様な意味を持つ多義語であり、その意味拡張の様相も複雑である。しかし、後述するように、一般的に「生まれる」に対応するとされる韓国語の태어나다 [taeonada] は、意味拡張がほとんど進んでおらず、基本的な意味に限定して用いられていることが分かる。その要因として、韓国語の場合は、「生命の誕生や物事の出現」という事態に対して、下に示すように태어나다 [taeonada] のみならず様々な関連語（類義語）を用いて表しているという点があげられる。一方、日本語の場合は、（日本語にも）様々な関連語があるにも拘わらず、「生まれる」が広範囲の事象を表すこと

ができることは、特筆すべき点である。

- ・ 태어나다 [taeonada] 和訳：生まれる
- ・ 출생하다 [chulsaenghada] 和訳：出生する
- ・ 탄생하다 [tansaenghada] 和訳：誕生する
- ・ 발생하다 [balsaenghada] 和訳：発生する
- ・ 생기다 [saenggida]／생겨나다 [saenggyeonada] 和訳：生じる・できる／生じ出る
- ・ 나오다 [naoda] 和訳：出てくる

以下では、日本語の「生まれる」に対して、韓国語の태어나다[taeonada]と上記の関連語がどのような対応関係にあるかを検討する。

表3 「生まれる」と태어나다 [taeonada] の対応関係

「生まれる」の意味		主な共起語	태어나다	関連語
大分類	小分類			
生命の誕生		人間、赤ちゃん、娘、子、女の子、息子、孫、奇形児、障害児、子犬、子猫、牛、稚魚、生物、命、生命	○	출생하다 탄생하다
立場・地位の獲得		女、職人の子供、日本人、長男、霊能者、次男、皇子、一員、奴隷、嫡子、末っ子	○	출생하다
人物・組織の出現		歴史的人物、ヒーロー、女性監督、億万長者、英雄、失業者、犠牲者、独裁者、難民、自衛隊、組合、国連	⁽⁹⁾ △	탄생하다 발생하다 나오다
物の出現	商品・製品	商品、製品、品種、酒、ワイン	×	탄생하다 나오다
	場所・地域	店、空間、ハリウッド、地球、星、(都として) 京都、古代ギリシャ	×	생기다/ 생겨나다 탄생하다
	創作物	名曲、傑作、名作、作品、音楽、映画、ドラマ	×	탄생하다 나오다

事柄の出現	関係	人間関係、絆、対立、交流、亀裂、対立、競争	×	생기다 / 생겨나다
	状況・事態	状況、変化、現象、ニーズ、需要、課題、問題、責任	×	생기다 / 생겨나다 발생하다
	結果	格差、効果、結果、成果、利益、損失	×	생기다 / 생겨나다 발생하다 나오다
	社会・文化	文化、社会、文明、風習、歴史、習慣	×	탄생하다 ⁽⁰⁰⁾ 생기다 / 생겨나다
	言語・記録	表現、記録、会話、意味、伝説、新記録	×	생기다 / 생겨나다 탄생하다 나오다
	機会・時間	機会、チャンス、時間、余裕、選択肢、出会い	×	생기다 / 생겨나다
	技術・能力	技術、強さ、力、応用力、説得力	×	탄생하다 생기다 / 생겨나다 나오다
	制度・仕組み	制度、仕組み、産業、ビジネス、雇用、治療法	×	탄생하다 생기다 / 생겨나다 나오다
	学問	民俗学、社会学、心理学、理論、主義、理念、宗教	×	탄생하다 생기다 / 생겨나다
	活動	動き、活動、行動、発見	×	생기다 / 생겨나다
心的現象の出現	性向・特性	違い、メリット、多様性、客観性	×	생기다 / 생겨나다 나오다
	気持ち	安心感、不信心、一体感、感情、疑問、団結心、自信、感覚、誤解、信頼、笑顔、感動、意欲、愛、笑い	×	생기다 / 생겨나다
	思考・知恵	仲間意識、集団意識、発想、思想、考え方、考え、工夫、知恵、アイデア、発想、価値観、世界観	×	생기다 / 생겨나다 나오다

表3から分かるように、日本語の「生まれる」は生命(有情物)の誕生に留まらず、様々な物事の出現や心的現象といった抽象的な事柄につ

いても用いられるのに対して、韓国語의 태어나다 [taeconada] は、基本的に生命の誕生、人物や組織の出現といった意味（「生まれる」の意味 1, 2, 4 に限定して用いられ、その他の意味に関しては、関連語（類義語）で代用されていることが分かる。その要因については現時点では不明であるが、今後関連語の意味用法の分析も含めてさらに詳細に検討する必要がある。

5. まとめ

以上、本稿では動詞「生まれる」が持つ複数の意味を記述し、それら複数の意味の関連性について考察した。その結果、「生まれる」についてスキーマ的意味・フレームを含めて、23の意味を認定することができた。また、意味間の関連性については、比喩の観点から考察を行い、その詳細を明らかにした。

また、以上の分析結果に基づき、韓国語의 태어나다 [taeconada] との意味の対応関係について検討した。その結果、日本語の「生まれる」は多様な意味を持つ多義語であり、その意味拡張の様相も複雑であるが、この「生まれる」に対応する韓国語의 태어나다 [taeconada] は、意味拡張がほとんど進んでおらず、基本的な意味に限定して用いられていることが分かった。その要因として、韓国語の場合は、「生命の誕生や物事の出現」といった事態に対して、様々な関連語（類義語）で代用しているという点があげられる。

参考文献

李澤熊 (2020) 『日本語の意味研究の新たな扉を開く—意味分析の方法と実

- 際一』、開拓社。
- 李澤熊 (2023) 『現代日本語における意図性副詞の意味研究—認知意味論の観点から—』、ひつじ書房。
- 北原保雄 (2011) 『明鏡国語辞典』第3版、大修館書店。
- 国広哲弥 (1982) 『意味論の方法』、大修館書店。
- 朱信源 (編) (2005) 『標準韓国語辞典』、白帝社。
- 新村出 (編) (2008) 『広辞苑』第6版、岩波書店。
- 瀬戸賢一 (2007) 「メタファーと多義語の記述」、楠見孝 (編) 『メタファー研究の最前線』、pp. 31-61、ひつじ書房。
- 松村明 (監) (2012) 『大辞泉』第2版、小学館。
- 松本曜 (2010) 「多義性とカテゴリー構造」、澤田治美 (編) 『語・文と文法カテゴリーの意味』(ひつじ意味論講座1)、pp. 23-43、ひつじ書房。
- 民衆書林編集部 (編) (1998) 『日韓・韓日辞典』、民衆書林。
- 靱山洋介 (2001) 「多義語の複数の意味を統括するモデルと比喩」、『認知言語学論考』No. 1、pp. 29-58、ひつじ書房。
- 靱山洋介 (2002) 『認知意味論のしくみ』(シリーズ・日本語のしくみを探る)、研究社出版。
- 靱山洋介 (2010) 『認知言語学入門』、研究社出版。
- 靱山洋介 (2016) 「多義語の多様性：典型的な多義語と単義語寄りの多義語」、『日本認知言語学会論文集』第16巻、pp. 512-517、日本認知言語学会。
- 靱山洋介 (2019) 「多義語分析の課題と方法」、プラシャント・バルデシ・靱山洋介・砂川有里子・今井新悟・今村泰也 (編) 『多義動詞分析の新展開と日本語教育への応用』、pp. 32-50、開拓社。
- 靱山洋介 (2020) 『実例で学ぶ 認知意味論』、研究社。
- 靱山洋介 (2021) 『[例解] 日本語の多義語研究—認知言語学の観点から—』、大修館書店。
- 靱山洋介・深田智 (2003) 「第3章 意味の拡張」、松本曜 (編) 『認知意味論』(シリーズ認知言語学入門第3巻)、pp. 73-134、大修館書店。
- 森田良行 (1989) 『基礎日本語辞典』、角川書店。
- 森山新 (編著) (2012) 『日本語多義語学習辞典 動詞編』、アルク。
- 山田忠雄・柴田武・酒井憲二・倉持保男・山田明雄・上野善道・井島正博・笹原宏之 (編) (2012) 『新明解国語辞典』第7版、三省堂。
- Evans, V. and M. Green (2006) *Cognitive Linguistics: An Introduction*. Edinburgh: Edinburgh University Press.
- Fillmore, C. J. (2003) “Topics in Lexical Semantics.” In *Form and Meaning in*

- Language*. pp. 201–260. Stanford: CSLI Publications.
- Fillmore, C. J. and C. Baker (2010) “A Frames Approach to Semantic Analysis.” In Heine, B. and H. Narrog (eds.) *The Oxford Handbook of Linguistic Analysis*. Oxford: Oxford University Press. pp. 313–339.
- Geeraerts, D. (2010) *Theories of Lexical Semantics*. Oxford: Oxford University Press.
- Lakoff, G. (1987) *Women, Fire, and Dangerous Things*. Chicago: The University of Chicago Press. (池上嘉彦・河上誓作他訳 (1993) 『認知意味論』、紀伊国屋書店.)
- Langacker, R. W. (1987) *Foundations of Cognitive Grammar* (Vol. 1). *Theoretical Prerequisites*. Stanford: Stanford University Press.
- Langacker, R. W. (1990) *Concept, Image, and Symbol: The Cognitive Basis of Grammar*. Berlin: Mouton de Gruyter.
- Langacker, R. W. (1999) *Grammar and Conceptualization*. Berlin: Mouton de Gruyter.
- Langacker, R. W. (2008) *Cognitive Grammar: A Basic Introduction*. Oxford: Oxford University Press. (山梨正明監訳 (2011) 『認知文法論序説』、研究社出版.)
- Tuggy, D. (1993) “Ambiguity, Polysemy, and Vagueness.” In *Cognitive linguistics* 4 (3). pp. 273–290.

注

- (1) Tuggy(1993)にも同様の趣旨の主張が見られ、ambiguity (両義性：同音異義語)、polysemy (多義性：多義語)、vagueness (漠然性：単義語)の連続性を指摘している。つまり、一方の端は同音異義語、他方の端は単義語が占め、その中間に、意味の定着度の度合いが異なる多様な多義語が段階的に存在するという立場をとっている。
- (2) Lakoff(1987)、Evans and Green(2006)、Geeraerts (2010)、瀬戸 (2007)などを参照されたい。
- (3) Langacker (1987, 1990, 1999, 2008)などを参照されたい。
- (4) Fillmore (2003)、Evans and Green (2006)、Fillmore and Baker (2010)、松本 (2010)などを参照されたい。
- (5) 意味分析の方法に関する詳細は、李 (2020, 2023)も参照されたい。
- (6) 本節は、『国立国語研究所基本動詞用法ハンドブック (<http://verbhandbook.ninjal.ac.jp>): 辞典』において、筆者が担当した「生まれる」に修正・加筆

したものである。

- (7) 本稿では、意味1を「生まれる」のプロトタイプの意味として考える。コーパス検索システム(NLT)を使って、「名詞が生まれる」という共起関係を調べたところ、上位13位すべてが意味1として用いられるものであった。このように、「頻度」という観点から見た場合、意味1をプロトタイプの意味として考えるのは妥当であろう。なお、プロトタイプの意味の認定の問題をめぐっては、様々な観点から考察がなされているが、一般的にプロトタイプの意味は、拡張した意味を理解する上での前提となり、具体性が高い、母語話者の頭の中で認知・想起されやすい、用法上の制約を受けにくいといった特徴を持つ(瀬戸(2007)、初山(2021)など)。
- (8) 格助詞「に」は、〈所有〉や〈能力〉の意味用法を表す場合、「～に～が」という語順になる傾向がある。〈所有〉:[私に][妹が]いる(生まれる)。
〈能力〉:[彼に][ゴルフが]できる。
- (9) 태어나다 [taeconada]は「歴史的人物、ヒーロー、女性監督、億万長者、英雄」のような語とは共起するが、「失業者、犠牲者、難民、自衛隊、組合、国連」のような語とは共起しにくい。
- (10) 탄생하다 [tansaenghada]は「習慣」など、一部の語とは共起しにくい場合もある。

Do-It-Yourself Websites for University Teachers

R. Jeffrey BLAIR

Abstract

Information technology had already been dramatically transforming education when the COVID-19 pandemic pushed the rate of change to hyper-speed. Chalk and talk was quickly replaced with PowerPoint presentations, classroom projectors, YouTube lectures, and virtual attendance on Microsoft Teams and Zoom. The vast potential of the World Wide Web, meanwhile, has largely been ignored. In this paper I explain (a) what I have been doing with my university website for the last 23 years and (b) how the next generation of teachers can take full advantage of the Internet's resources.

How do students learn to speak a foreign language? How can teachers facilitate that process? These are the questions that teachers ask themselves as they plan their classes. Each time they walk into a classroom, they need to have a plan, a Lesson Plan. It might be as simple as covering certain pages in a textbook. It might include some supplementary materials that are explained on a printed handout. When I was working at the Nagoya Y.M.C.A. English School (1978–1992), coordinators made these decisions for all the instructors. Our textbook, *Modern English* (published by Seido Language Institute) was a series of ten volumes. Each of the ten units in a volume began with a dialog or a short narrative. That was followed by lots of oral drills. At the end of each lesson

there was a listening comprehension lesson (NOT in the textbook, only on audio tape) which concluded with lots of questions, followed by short answers. All the textbook dialogs, narratives, and drills were on audio tape, and a lot of class time (part of it in a language lab) was spent listening to and mechanically responding to those tapes.

After graduate school (1992–1996) I started teaching at Aichi Gakuin Junior College and University. There was a lot more freedom than at the Y.M.C.A. Individual teachers chose the textbooks for their classes and taught each lesson as they saw fit. I chose NOT to use a textbook. I wanted the content of the students' conversations to come from them, rather than have them mimic a textbook. I wanted them to decide for themselves (a) what to say and (b) how to say it in English. That is what people do in real conversations. Without a textbook, of course, their lessons depended entirely on my Lesson Plans. For the most part I stuck to a simple plan (Blair, 2011, 132–133). I put the students into small groups of 3 or 4 people and gave them a topic to discuss.

Self-Introductions	Family and Relatives	Personal Memories
Television	Movies	Music
Language Use	Communication	Reading
The Environment	Nature	Natural Disasters
Work and the Economy	Neighborhoods	Cities
History	News Events	Crime
Art	Fashion	Love and Marriage
Food and Diet	Sports and Exercise	Health and Medicine
University Studies	College Life	Education and School

Students prepared at home by writing a 90-word paragraph on the assigned topic. These paragraphs helped them start their discussions. To keep the conversations going they asked each other follow-up questions, which they recorded in their Group Report. I collected their questions, rephrased most of

them, and added questions of my own to create a List of Questions for each of these topics. These lists became a student(-and-teacher)-generated resource for the students that came after them. Each year the lists would be revised, updated, and made available to students.

Source Documents and Webpages

At a conference in 1999 I attended a workshop that taught the participants how to construct simple webpages that could be uploaded to the Internet. I walked away from that conference with a template for an educational tool that was to become more and more powerful over my next two decades of language teaching and beyond ... into the coronavirus era of paperless, online teaching. As a full-time university teacher, I was able to establish my own website on the Aichi Gakuin University server. The process was very simple, involving a minimum of paperwork, completed with the kind help of the staff of our computing department. What started as a single homepage evolved over the years into hundreds of webpages linked together and externally to other sites into a formidable website. Each of those webpages have descended from the original template, mimicking the biological process of evolution—reproduction and mutation.

I created my website with and have continued to use a Classical Mac computer and very simple software. Even today I rely on an old i-Mac, which I purchased from a colleague who was retiring. The source code for each webpage has been copied and pasted from the source code of previous webpages into a Simple Text document. Whenever I double-click on a source document (example on the next page) the computer file opens as a text file, revealing the source code.

To view the webpage I only have to click and drag the source document to my computer's Internet browser (Internet Explorer). Then the computer file opens and appears in a separate window as a webpage. You can think of the source document as a blueprint for the webpage. The browser reads it and constructs the webpage. I click back and forth between the two windows as I revise the source code. Saving the new source code and reloading the webpage shows me what the revised page looks like at each step of the revision process.

Source Document	Webpage
<pre> <html> <center>Television</center> <p>Actors and Actresses:
How many can you name?
Who is your favorite? <p>TV in General:
When do you watch TV?
Do you watch it with your family or alone? <p>bold
<i>italics</i>
<u>underline</u> </html> </pre>	<p style="text-align: center;">Television</p> <p>Actors and Actresses: How many can you name? Who is your favorite?</p> <p>TV in General: When do you watch TV? Do you watch it with your family or alone?</p> <p>bold <i>italics</i> <u>underline</u></p>

Example 1: Source code and text

Example 1 presents a simple sample of (a) the source code for a short List of Questions with some individual words added to the bottom and (b) the resulting webpage. Anything enclosed in angular brackets is an instruction. These instructions do NOT appear on the webpage. Some of them occur in start-stop pairs. A slash mark at the beginning indicates a Stop Instruction.

Once a source document is uploaded to a server, students can access the

webpage anytime, anywhere with their SMART phones, tablets, and laptops. With only these few instructions similar lists and even full texts in paragraph form can be created and spiced up (bold, italics, underlining).

By convention the filenames of source documents end in “.html” (examples: index.html for an index page, contact.html, etc.). FTP (file transfer protocol) software is needed to upload these source documents to a server. I have continued to use the same software that I began with back in 1999, a simple program called Fetch. Anybody with access to a server can create source documents and upload them to the Internet. Full-time university teachers typically have access to their university server, so let’s get started.

Starting a Website: Homepage Profile

You probably want to begin with a homepage (also called a top page or index page). It might include (a) one or two paragraphs introducing the website, a short personal profile, and (b) lists of degrees held, academic positions, publications, conference presentations, current classes, and some contact information. Perhaps you will want to spread this information out over a few pages. In that case, you can link the pages together into your own little mini-web.

Source Document	Webpage
<pre><html> <p> ... my publications
 ... my contact information </html></pre>	<p>... my <u>publications</u> ... my <u>contact information</u></p>

Example 2: Links from text to another webpage

The example above illustrates the source code for links from text within one webpage to the top of another page. In the source document I have put the text that will appear on the webpage in bold letters to separate it from the instructions. Instructions, of course, do NOT appear. Notice also that bold letters in the source document do NOT appear as bold letters on the webpage ... unless you enter instructions to that effect in the source code.

The Start Instruction for the link contains the URL address of the source document to which you are linking. The first part is the university server address (www3.agu.ac.jp). This is followed by folders nested within folders. Vincent Ssali is a full-time teacher with a folder for his website (~vicks62) on the AGU server. Now that I am retired, I have moved the core of my website into a folder on his site (jeffreyb). Within the jeffreyb folder is a source document (contact.html) with my contact information and another folder (research) for source documents concerning my research activities, including an index page (index.html). The source documents are text files, but could just as easily be image files, audio files, or video files.

As a final touch to your profile, you might want to insert a photo. Image files for photos and all other digital images, even those that are embedded in

a webpage have their own URL address on the Internet. Their filename is the last part of the address and ends in an extension (.gif or .jpg depending on the format). Start Instructions for image links will locate, download, and embed the image into any webpages that contain those links. The source code also controls the horizontal and vertical dimensions of the embedded image.

Source Document	Webpage
<pre data-bbox="206 472 608 807"><html> <center> </center> </html></pre>	

Example 3: Image linked to a different image

The photo (newBlair.jpg) in this example, is linked to an older photo of a younger me (Blair.gif). Students that click on the embedded newBlair photo will see Blair.gif as a bare image, with the size and proportions dictated by the image file itself (not the link). Embedded photos are quite often linked to their own source document, thus producing the photo in its original size (usually larger) and proportions.

Once you have uploaded your mini-web to a server, you may think that you have reached the “top”. In a sense, you have. Sadly, this IS as far as the few teachers that have websites typically get, a tiny cul-de-sac on the World Wide Web. Check it out: (1) ask your colleagues if they have a website and then (2) try accessing them. Do any webpages appear in a Google search? Near the top? What keywords will bring them to the top page? Soon you will come to realize

that these websites have only scratched the surface of their potential use in education.

The power of the World Wide Web is in its external links, transforming websites into launchpads. You have complete freedom to link the images and text on your webpages to the full range of files on the Internet: text files, image files, audio files, and video files.

Superhighway or Copy Machine?

The Internet is often described as an Information Superhighway. Indeed, it is. Yet it is important to note that the information speeding down the many branches of this highway consists of copies of computer files. In other words, “the World Wide Web is both a *decentralized* digital library ... and a *global copy machine* (Blair, 2006, 212).” The Superhighway distributes digital copies of text, image, audio, and video files from servers to computers all over the world. People do NOT actually visit a website or webpage. They get copies of the blueprints, the computer files that produce whatever they see and hear on their computer. Those source documents remain on their computer for some time. The sights and sounds are reconstructed from the documents whenever users click on the related links or icons.

Many webmasters intentionally restrict the links on their site to internal links. They want to keep their “visitors” from wandering off the reservation to other websites. Most educators, on the other hand, are trying to expand each student’s world and broaden their outlook. “Expand your world through English” was an advertising slogan that we used at the Y.M.C.A. It would seem natural then to use external links to launch ourselves, our colleagues, and our students into cyberspace ... to get us outside of our Ivory Towers.

Before we leave our Ivory Towers, however, let's explore the tower itself, the university website. A great deal of information is stored on each university's website. Navigating such large sites and accessing the information that *you want* can be a problem for you and for your students, maybe even for some of your colleagues. The solution, however, is simple ... create links to that information from a prominent location on your website.

One website that teachers at Aichi Gakuin University often use is called WebCampus III. I became familiar with it during the spring term of 2020. Because of the COVID-19 Pandemic, all three of our campuses were closed. My only contact with students was to send weekly messages to each class via WebCampus. Their classwork came back as responses to those messages. Regular use made me keenly aware of its many functions in an increasingly paperless working environment. Teachers now use it to post syllabi, office hours, and grades. The university uses it for a wide range of announcements, including the lists of students in each class and the results of students' class evaluations. Teachers respond to the evaluations by posting their comments online.

I have two main pages on my Webfolder: (1) the Webfolder Index and (2) Online English Lessons. They both come up at the top of a Google search for "jeffreyb", making them excellent locations for links that provide quick access to useful webpages. My students bookmark the Online Lessons and use them every week. I have placed a link to the Top Page of WebCampus III underneath those Lessons. On my Webfolder Index I have placed links to some useful information, including (a) the Meitetsu bus schedule between Fujigaoka and the Nisshin Campus and (b) faculty introductions for the Division of Liberal Arts and Sciences(教養部)and for the Faculty of Letters(文学部). These shortcuts alleviate the need to navigate a convoluted maze of links from the Top Page of the AGU website to that information.

Links to Academic Papers

Various systems of citation have been developed for printed publications to give credit to original work and to help readers to go back to original sources. Anyone who wishes to track down and verify academic source material goes from the in-text cite to the full-text citation in a reference section at the back of a book or the end of an article, just a matter of flipping pages. Then they must locate the publication itself, ordering it or finding it in some library. This presents a much greater challenge. Links on webpages can streamline this process. Let's start by considering a list of publications like the ones posted on most university teachers' websites.

At Aichi Gakuin Junior College (later the Junior College Division of AG University) I published articles in *The Faculty Journal*. It came out annually and copies were distributed to university libraries all over Japan, where, I suspect, they only gather dust. Hoping to increase my readership, attract some interest, and maybe even get some feedback, I posted the full texts on webpages in my Research Folder. A link from the word "Research" near the top of the Website Index led to the folder's index page, which listed my publications. The title of each article was then linked to its full text. People from the four corners of the Earth were able to read the articles and respond. A Russian linguist, for example, was thrilled to find that I had discussed "interlanguage". Her colleagues, it seems, had never heard the term. These kinds of keywords buried in webpage texts get picked up by search engines such as Google and Yahoo.

The Division of Liberal Arts and Sciences(教養部) has two faculty journals. The present article is in the one devoted to language issues. The volumes of *Foreign Languages & Literature* since 2005 have been posted on the AGU website. I no longer have to post the full text of my articles. My department has already done that. I simply link the titles on my Research index page to the

department's Goken Kiyō webpage. Unfortunately the Junior College Library only posts the index page of each volume of its faculty journal on the Internet. I have, nonetheless, linked the volume numbers of my junior college article from my Research index to those index pages.

Source Document	Webpage
<pre><html> <p>Blair (2023). Do-It-Yourself Websites. Foreign Languages & Literature, 48/1, pp. 31–54. <p>Blair (2003). <u>Research and Process Writing</u>. The Faculty Journal, 11, pp. 94-106. </html></pre>	<p>Blair (2023). <u>Do-It-Yourself Websites</u>. <u>Foreign Languages & Literature</u>, 48/1, pp. 31–54.</p> <p>Blair (2003). <u>Research and Process Writing</u>. <u>The Faculty Journal</u>, 11, pp. 94-106.</p>

Example 4: Links from references to university publications

I encourage all university teachers to create similar links from reference sections and in-text citations in their lectures and publications to any source material on the World Wide Web. The bottleneck in this instantaneous system of citation is the infinitesimal number of teachers that have websites with links to their publications.

Like a Global PowerPoint Presentation with Links

Now let's return to the classroom and teaching materials. Teachers often supplement whatever textbook they are using with short presentations and

handouts. PowerPoint has become immensely popular for both business and educational presentations. As an alternative to PowerPoint you can post outlines or the text of your presentations on webpages. That way they are available to you and your students anytime, anywhere. They can be projected onto classroom screens or viewed on computer tablets or cellphones. You can print them up to pass out to students and, if they lose them or just lose track of them, they themselves can print out replacements. You can link your texts to informative webpages, such as Wikipedia (see Blair, 2008). You can use hyperlinks to import images, change the dimensions to fit the size you want, and embed them in the text. This is exactly what the World Wide Web was designed to do.

To link or not to link that is the question! Competent webmasters know how to restrict access to the webpages, images, and other files on their website. They can, and some do, prevent links to some pages directly, because they prefer people enter at a top page and then navigate using the links provided on their site. Teachers at Aichi Gakuin University can link to WebCampus III, for example, and (after entering our passwords) proceed to specific pages. We cannot, however, link directly to those same pages.

For many, perhaps the vast majority, of us teachers the purpose of having a website is to distribute information and ideas as far and as wide as possible. We love to have people bookmark and link to our pages. The more links the better. A great number of links may even push some of our webpages to the top of a search on Google, Yahoo, and other search engines. We understand and accept the true nature of the World Wide Web, that it is a global copy machine.

Link Permission

Linking to webpages seldom presents any problems. The use of images, including photographic images, on the other hand, is a very delicate matter (see Blair 2006 for a detailed discussion). Some webmasters obtain permission to use photos or works of art on their site, yet fail to take any precautions that would protect them from being copied. The computer of anyone who views a webpage with that image, of course, has downloaded a digital copy of it (the image file). Modern computers allow users to produce an icon and save the image simply by clicking on the image and dragging it to a folder or the desktop. The webmaster and the artist have then, in effect, lost control of the image, because these copies can easily be uploaded to servers or attached to e-mails.

Photographers, artists, and the webmasters that see one of their images embedded in your webpage might react as though you had “stolen” it, thinking that you had uploaded a copy to your server. It may be difficult for them to realize that the copy that they see on your webpage is on *their* computer (stored separately from the source document for your webpage) and was distributed by *their* server. Even after that realization sinks in, they might accuse you of “stealing” their bandwidth. The solution is simple ... remove the link.

Here are several steps that you can and should take to avoid any suspicion of wrongdoing and assure people that you are a responsible webmaster. (1) When you find an image on another person’s website that you want to link, look for an e-mail address. Send them a message requesting permission to link. (2) At the bottom of your webpages, post the URL addresses of all image files that you link and label them either “used with permission” OR “permission pending”. (3) Link the phrase “permission pending” to a webpage that requests permission and explains the non-commercial nature of your website. (4) In a prominent

location on your Top Page(s), post a request for people to contact you directly with any questions, comments, or *criticisms*. (5) If anyone does criticize a link to one of their webpages ... remove it promptly and notify them that you have done so.

Source Document	Webpage
<pre> <html> <center>Links</center> <p>Images—Used with Permission
www.xyzgallery.com/...
Images—Permission Pending
www.abcgallery.com/... </html> </pre>	<p style="text-align: center;">Links</p> <p>Images—Used with Permission www.abcgallery.com/...</p> <p>Images—<u>Permission Pending</u> www.abcgallery.com/...</p>

Example 5: With permission OR permission pending (with link)

On the Lists of Questions mentioned above (page 33), I often tried to include a few links to interesting webpages that had related information. If the webpage also contained some images, I would make a point of embedding one of them in my webpage in order to form a pair of links: one to the image and another to the webpage. The main problem with links to external webpages is that “they go dead without any visible sign of their demise” (Blair, 2011, 136). Indirect links, like those to a webpage (see Example 2 above), are activated only when you click on them. Unless you check those links on a regular basis, you cannot be sure that they still work. The source document may have been moved, removed, or renamed. Direct links to embedded images, on the other hand, are activated whenever you open the related webpage. Unless the link has gone dead, the images appear automatically. An empty image tells you that something is

wrong (Blair, 2006, 212), that you should check all links to that website and, if necessary, repair them. If they cannot be fixed, then you can remove them.

In 2002 I expanded my website to include students' work for a seminar class (Blair, 2003). I taught second year junior college students to locate information from multiple sources on the Internet, to synthesize the information into a coherent report, and to communicate their findings to a world-wide audience by posting it on a webpage. Their in-text citations were linked to the original sources of information (external webpages). If they could find a suitable image from the same website, we embedded it in their report. Full citations in their reference section contained authors' names, the date the webpages were posted (or last updated), and titles. Those titles were linked to the webpages. Underneath the reference section came a list of image links separated into the two sections described above: used with permission OR permission pending.

I would help students request permission to use the images and send the requests from my own e-mail account or by posting a letter. The most common reaction was no reply. Those links remained in Permission Pending. Only a few webmasters declined the request for permission, for a variety of reasons. The reasons were interesting and some quite unexpected. The owner of a website called Photographs of the Day was posting photographs that had been donated, and he wanted to protect the photographers' property rights. I cut all my links, but the fact that I (or anyone else) could link to the photos demonstrates that they were, and I assume remain, completely unprotected. Another webmaster felt it would be too troublesome to keep track of who he had given permission to and how those images were being used. The website of a world-famous cartoon character stated that written permission was required, so I wrote ... only to be informed that permission was *never* given. The company representative did not include in his reply any warning or denial of the request, instead he seemed completely unconcerned about a link. It seemed the requirement for

written authorization was simply a formulaic addition meant to preserve the company's standing to sue in a court of law if any outside entity profited from use of the image. A dolphin expert at another website was willing to allow links to images on his website but noted that the image in the student's report was of a different species from the one she was writing about. I cut the link and explained the problem to my student. Yet another webmaster suggested that I copy his image and upload it to my university server, rather than link it. I explained to him the reason I preferred an image link to taking full possession of the image. The direct link provides a visible warning that corresponding indirect links have been broken.

Making Grammar Patterns and Meaning Visible

At the beginning of the third millennium two new platforms made their debuts on the World Wide Web: Wikipedia in January 2001 and YouTube in February 2005. They have brought a massive amount of new content to the Internet and encouraged free linking to their resources. Wikipedia maintains the high quality of its text and images through a flexible and chaotic editing process. YouTube takes a much more *laissez-faire* attitude, but the algorithm for its search engine tends to push higher quality content towards the top. This gives educators new powerful tools to replace dictionaries, flashcards, and grammar books—the traditional tools used to transform English vocabulary into meaning for foreign students.

Standard **dictionary definitions** provide short, awkward explanations of individual words. When space is available, the inclusion of even a few pictures and sample sentences greatly helps elucidate their meaning and usage. Unlike printed media Wikipedia does not have to worry about space. Lengthy articles

can be subdivided and linked together, or to other related articles. Images can be sized down and embedded, then blown up with a click to reveal more detail. Similar Wikipedia articles in several languages are also just a click away.

Grammar rules are often equally obscure, unless they include a liberal dose of sample phrases and sentences. Vocabulary study books with sample phrases and sentences that include their translations (see Blair, 2020) are probably the most effective printed materials available to Japanese students. Hyperlinks to YouTube videos allows written phrases and sentences to be translated to visual images rather than written words in the student's language. In other words, the direct visual association between (a) written nouns and (b) objects represented by **flash cards** has been expanded to include the actions described in sentences. Flash cards can be replaced by **flash videos**.

Source Document	Webpage
<pre><html> <p>A family went on a long trip.
The children played a simple game. </html></pre>	<p>A family <u>went</u> on a long trip.</p> <p>The children <u>played</u> a simple game.</p>

Example 6: Links from text to a YouTube video

The YouTube video in Example 6 has been linked to the verbs of a pair of sentences. This emphasizes the central role of verbs in the meaning and the structure of sentences. The video is 32 minutes and 55 seconds long in its entirety. The two links take students to specific locations within the video: (a) one at 3 minutes and 40 seconds (in the middle of the family's trip) and (b) the

other thirteen seconds later (when the game begins).

Now recall my mention of the oral drills that I used at the Nagoya Y.M.C.A. English School. The sentences used in the drills provided a grammatical context for vocabulary and reinforcement of important sentence patterns. Yet a rich story context could greatly have aided retention of the material, especially if it had been supplemented with the visual imagery available using videos.

Micro-Patterns within Macro-Patterns: A 4|X Framework

English sentences (and those of the vast majority of written languages) are written as a linear sequence of words. It seems reasonable, therefore, to consider how best to remember linear sequences. Take, for example, the following sequence of selected numbers from 1 to 13.

1 3 5 6 8 10 12 13

This is not just an arbitrary pattern. It occurs in music: a major scale. You can play a C major scale on the B string of a guitar with one finger by pressing these frets. It is perhaps easier to remember the pattern if you break it down into three 4-fret parts. Placing your index finger on the first fret, you press 1 and 3 (ring finger). Then move the index finger to the fifth fret and press 1, 2 (middle finger), and 4 (pinky). Finally, you move the index finger to the tenth fret and press 1, 3, and 4. Instead of remembering these eight positions, you can reduce the cognitive load on your memory by remembering three positions and three finger patterns.

1 3 // 1 2 4 // 1 3 4

There is an additional advantage, flexibility. You can recombine the parts into several different patterns. Two of the three patterns can be used to generate a minor scale.

1 3 4 // 1 3 4 // 1 3

The three patterns can also be rearranged to generate an Andalusian scale.

1 2 4 // 1 3 4 // 1 3

As an added benefit for guitar players, the three patterns can be played on three adjacent strings, allowing the hand to remain stationary and each finger to be assigned to a single fret. The pattern for a C major scale would look like this, with the index finger (1) assigned to the fifth fret on the G, B, and high E strings.

	5 th	6 th	7 th	8 th	frets
E	1		3	4	
B	1	2		4	
G	1		3		

Three finger patterns played on 3 strings

Likewise the sequence of words within a sentence is arranged in small (micro) patterns within the larger (macro) pattern (Blair, 2014, 109–112). This can be visually displayed (see next page) in a table with four columns (4☒).

Source Document			
<pre><html> <center><table width=90% border=1 cellspacing=3 cellpadding=5> <th colspan=4>4☒ Sentences</th> <tr align=center> <td width=22%>S ☒</td><td width=22%>V ☒</td> <td width=22%>O/C ☒</td><td width=22%>+A ☒</td> <tr align=center> <td>A family</td><td>went</td><td>&nbsp;</td> <td>on a long trip
by car.</td> <tr align=center> <td>The two children</td><td>played</td><td>a simple game</td> <td>along the way.</td> </tr></table></center> </html></pre>			

Webpage			
4☒ Sentences			
S ☒	V ☒	O/C ☒	+A ☒
A family	went		on a long trip by car.
The two children	played	a simple game	along the way.

Example 7: A table that illustrates grammar patterns

The words and phrases within the framework of the table can, of course, be linked just like any other text. You can emphasize certain words or even letters by putting them in italics and/or bold print. You can, in addition, accent certain parts of the 4☒ framework with background colors. I often use a white background for tables to make them stand out from the light gray (#dedede) background of my webpages (easier on the eyes than bright white). For headings I use a light blue (#ceffff) background, except for the V☒ slot. To emphasize

the central role of this slot, I use a bright yellow (#ffff00) background. The six-digit code for html colors, by the way, is written in hexadecimal. Each two digits from 00 to ff represent the intensity of each primary color (red, green, and blue) used in additive mixing. The details are beyond the scope of this paper, which is being printed in black and white. For more information and to see the colors themselves, please go to www3.agu.ac.jp/~vicks62/jeffreyb/color.html.

When webpages are printed in color the background colors are ignored and printed as white. If, however, you copy a webpage and paste it into a document those colors will be preserved. When you print the document, the colors will appear. This copy-and-paste procedure also provides a great way for you to insert tables into your printed materials.

Going Global, Going Paperless

During the spring term of 2020 our campuses were closed, because of the COVID-19 Pandemic. I was not able to talk to my students in person OR live online. My only contact with them was to send weekly messages. I decided to write up a lecture each week and post it on my website. In the Fall term my students were back in the classroom. I continued to revise and to use the lectures in class along with adlibbed comments. Sometimes I inserted notes into the lectures and wrote them out fully at a later date. Using the share function on Microsoft Teams, I was able to show each day's lecture to online students and simultaneously project it onto a screen at the front of the room. If students had trouble seeing the screen, they have been able to read the lecture on their cellphones, tablets, and laptops. When class was over, they could go to the webpage to review the lesson. Every lecture included a description of the day's practice activities (the lesson plan following the lecture). The lecture

and follow-up activities have all been completely transparent and available to students and the cyber-public twenty-four hours a day, seven days a week. When students have had questions, I was able to refer them to information on my website.

At present academic-oriented websites (except for Wikipedia and standard reference materials) are a tiny, balkanized collection of cul-de-sacs in cyberspace. Even with the power of a search engine, locating what you want is often like searching for a needle in a haystack of printed trivia and self-advertising. Audiovisual lectures on a myriad of topics, on the other hand, are readily available, TED Talks being perhaps the best known. YouTube has accumulated an astounding collection of interviews and lectures. I have been particularly interested in the advice of English teachers and polyglots (Blair, 2016). One of my webpages (www3.agu.ac.jp/~vicks62/jeffreyb/SLA.html) summarizes ideas that I think may be of value to eager students and overworked colleagues: advice about learning a foreign language that can energize them. The click of a hyperlink can bring guest speakers with a diversity of viewpoints into classrooms, providing inquiring minds food for thought.

For hundreds of years academia had relied on books and libraries to preserve the ideas of mortal human beings. The Internet gives us a more flexible space where ideas can reproduce, mutate, and flourish just as any biological species does ... a process of competition and evolution.

Acknowledgments

I wish to express my sincere thanks to my colleagues past (Y.M.C.A.) and present (A.G.U.)—Raoul Kennedy, Hiroshi Kondo, Saori Tsukamoto, and Heather Dioron—for their reactions to earlier drafts and their encouragement.

Not all the advice received was necessarily heeded, however, and I retain full responsibility for the final product.

This paper is dedicated to the memories (a) three friends: Robert Ireland (1951–2022) Culver Military Academy '69, Gary Zieve (1951–2019) Caltech '73, Quan Loi (1957–2016) a colleague at the Nagoya Y. M. C. A. and (b) two of my graduate school professors at the University of Hawaii: Dick Schmidt (1941–2017) and Mike Long (1945–2021).

Points of Contact

Any comments on this article will be welcomed and should be mailed to the author at 1-63-2 Nishino-cho, Atsuta-ku, Nagoya, Japan 456-0063 or e-mailed to him at pds.english (at) au.com. Some previous papers may be accessed at <http://www3.agu.ac.jp/~vicks62/jeffreyb/research/index.html>.

References

- Blair, R. Jeffrey (2003). Research and Process Writing on the Internet. *The Faculty Journal of the Junior College Division of Aichi Gakuin University*. 11, 94–106.
- Blair, R. Jeffrey (2006). Using Images Posted on the World Wide Web. *Kanka-shu: In Commemoration of the 55th Year of the Department of Human Culture*. 209–221 [364–352].
- Blair, R. Jeffrey (2008). Storing and Accessing Declarative Knowledge. *Ergo: In Commemoration of the Department of English Communication*. 219–225.
- Blair, R. Jeffrey (2011). Evolution in an EFL Classroom. *Foreign Languages & Literature*. 36:1, 131–152.
- Blair, R. Jeffrey (2013). Rules, Rules, Rules: Why do students hate grammar? *Foreign Languages & Literature*. 38:1, 123–141.
- Blair, R. Jeffrey (2014). Pattern Acquisition: Linear Sequences in Dancing, Music, and Language *Foreign Languages & Literature*. 39:1, 99–115.

- Blair, R. Jeffrey (2016). "Rules" for Motivating Students to Communicate in English. *Foreign Languages & Literature*. 41:1, 3–15.
- Blair, R. Jeffrey (2017). A Tale of Two Mind-Sets: Test English and English Communication. *Foreign Languages & Literature*. 41:1, 237–244.
- Blair, R. Jeffrey (2019). Stimulating Active Communication in an EFL Classroom with Video Stories. *Foreign Languages & Literature*. 44:1, 63–79.
- Blair, R. Jeffrey (2020). Vocabulary Acquisition: Verbs First. *Foreign Languages & Literature*. 45:1, 51–69.

メアリ・ブラッドン「最後の舞台出演」

松岡光治(訳)

第一章 誘惑

「ならず者だぜ、あいつは」と紳士が言った。

「まあ、わたしの夫ですよ」と女性は答えた。

どちらの言葉も大した内容ではなかったが、いずれも心臓が張り裂けそうな、激しい感情で唇が青ざめた人たちから発せられた言葉だった。

「それが君の返事かい、バーバラ？」

「神様が許してくださる唯一の返事よ」

「君を悲嘆に暮れさせ、下劣な悪事で君の稼ぎを湯水のように使って、このむさ苦しい住まいに閉じ込め続けるつもりなんだぜ。ロンドン中が君の美しさと天賦の才能をほめちぎってるというのに。助かる道も、逃げる道も、残されてないのかい？」

「いいえ」と、彼女は相手を身震いさせるような表情で答えた。「逃れることになるわ——いずれ、棺桶に入ってね。わたしが受けた虐待も償われるでしょう——最後の審判の日に」

「バーバラ、今に殺されちまうぜ、君は」

「それって、あの人ができる最高の親切だと思いませんか？」

紳士は取り乱した様子で部屋の中を行ったり来たりし始めた。女性は

半ば悲しげな、半ば冷ややかな、何か異様な表情で暖炉の上にある細長い鏡の方を向いた。そして、ロンドン中に称賛の嵐を巻き起こした自分の美貌をじっと見ていた。

その変色した鏡が彼女に見せたものは何だっただろうか？ それは、毎晩の稽古に加えて苦悩の重荷でやつれてしまい、青白く、弱々しく見える小さな顔、そして黒い瞳にただよう暗い影であった。だが、この瞳ときたら！ 昼間の冷たい光の中では、彼女の小さな白い顔には、あまりに黒く、大きく、光かがやいて見えた。一方、ランプの光に照らされた夜の劇場では、彼女の瞳はその下の頬紅と、その中で燃え上がる才能の炎とで、かつてないほど観客の目を奪い、心を魅了した——芝居の目利きたち（特にホレス・ウォルポール）はそのように言っていた。バーバラ・ストウエルはコヴェント・ガーデン劇場に冠たる花形役者だったのである。

この有名劇場の舞台に立つのは二シーズン目だったが、彼女の美しさと才能はまだ新鮮味を留めて輝いていた。とはいえ、ロンドンの人々は彼女の昼間の姿を見たことがなかった。馬車に乗って拳闘場に来ることも、社交界の競売会場に姿を現わすことも、パルテオン民衆娯楽場の仮面舞踏会で崇拜者たちにとって謎の人物になることも、セント・ジェームズ公園に行って乳清ホエーを飲むこともなかった。要するに、彼女はどこにも外出することがなかったのだ。それで、ロンドンの人たちは人目に触れない彼女の生活について様々な噂を立てていた。しかしながら、真実を言い当てたものは一つもない。事の真相はロンドンの有閑階級が流す噂話の中でもっとも陰鬱なものよりもさらに悲哀に満ちていた。バーバラ・ストウエルが世間と距離を置く理由は三つあった。第一の理由は彼女の夫が暴君で、無法者で、びた一文も彼女には残して行かないことである。第二の理由は夫のせいで悲嘆に暮れていること、第三の理由は彼女自身が死に瀕していることであった。

この最後の理由は彼女自身にしか分かっていない。その胸の痛みは聴診器で探ることができなかった——単眼鏡と金の握りのステッキという出で立ちの堂々とした医者が往診に来て、死に至る病の進行具合については説明できなかった。だが、バーバラ・ストウエルは自分に余命いくばくもないこと、この上なく短い寿命であることが十分に分かっていた。

彼女は元気はつらつとした青春時代の真ただ中にいたわけではない。三年前、ハートフォードシャー州にある村の田舎牧師の娘として、人目につかない穏やかで幸せな生活を送っていた。しかし、運が悪いことに、ロンドンで婦人帽子販売の商売をしていた伯母を訪れた際に、その家で現在の夫であるジャック・ストウエルに会ってしまったのだ。彼はコヴェント・ガーデン劇場の大根役者——容姿だけはよかったものの、単純な人たちに効果てきめんの悪賢さを備えた心の冷たい悪漢で、言いようのないほどうぬぼれが強い男であった。うだつが上がる役者によくあるように、舞台監督こそ自分の不倶戴天の敵であり、ロンドンの観客は自分がロミオやダグラスといった一連の主役をすべて演じるのを見たくてたまらないのだと思っていた。それで、与えられた端役にすねてしまい、酒と博打ばくちに慰めを求めた。ポウ街治安判事裁判所の管轄内で彼のように典型的な放蕩者を見つけようとしても、それは無理な話であった。しかし、この男は社交界で愛想よくふるまうすべを心得ており、「とても面白い奴」として通っていた。相手の情に訴えることができる技術があり、視線を天に向けて道義心や義侠心で燃え立つような男のふりをすることができたのだ。

バーバラは「白く塗った墓」のような男に清新な青春時代を無駄に捧げてしまった。この悪漢が彼女の少し風変りな美しさに魅了されたのは、彼女が田舎の英国女性というよりも、古いイタリアの絵画に見られるような美しい女性だったからである。人目を引く不思議な美しさはきっと

有名になるはずだ、このようなジュリエットであれば、自分もロミオ役できっと成功するぞ、と彼は考えた。心は新鮮さを失い、しなびてしまっていたにもかかわらず、この青年はできるだけ心を込めて彼女を愛してやった。結婚によって有利な立場になれると踏んでいたからに他ならない。それで、少しの説得とイギリス演劇から拝借した多くの甘美な台詞とで、彼は彼女の道義の障壁を打ちこわし、この涙もろい貞淑な娘に有無を言わせず、いかがわしい牧師が行なう秘密結婚を承諾させた。魔がさして承諾したことを悔やむ時間を彼女に与える前に式を挙げてしまったのである。

婦人帽販売人の伯母は荒れ狂った。というのも、彼女はストウエル氏が自分に懸想しているとばかり思っていたし、夫にしたいと考えるほど愚かではなかったものの、求婚者として引き留めておきたいと考えていたからである。ハートフォードシャー州の父も激怒し、「わしの知らない所で道を踏みはずし、永遠の破滅に向かったんだから、おまえが残り道の道をどう進もうが、わしの知ったことじゃない」と娘に言い放った。彼女には父と娘をもっと仲たがいさせたい義理の母がいたので、娘への溺愛から過ちを犯すことなど今まで一度もなかった父と和解できる可能性はほとんどないように思われた。それで、夫のジャック・ストウエルを唯一の友として、彼女は二十歳の時に実社会に出ることになった。若い娘のロマンチックな恋愛という妖しい魅力で感情が高まっていたので、彼しか頼れる人がいない状況では、こうした愛と希望の世界は自分が彼と一緒に装丁される一巻本のロマンスのように彼女には心地よく思えた。

しかしながら、この他愛もない愚かな愛は一ヶ月も続かなかった。結婚した夏の日の夜空で青白い光を放っていた三日月が満ち欠けする間に、彼女は夫婦の契りを結んだ相手の男が飲んだくれのギャンブル狂い、酔った時に暴力をふるう野蛮人、堕ちた女たちと暮らす中で女の貞節な

ど気かけなくなつた放蕩者、自己満足のためだけに生きる男、彼女への愛などは一時の気まぐれにすぎなかつたと思うような、そんな卑劣漢だということが判明した。

すぐさまストウエルは自分が知っている演劇のすべてを彼女に教え込んだ。本物の才能に恵まれていた彼女は、勉強熱心でもあったので、まもなく夫には演劇の知識がほとんどないことに気づいた。彼が伝統的なヒロインたちの習慣や行動について少ししか知らなかつたのに対し、彼女は自分なりの考えを持っていた。夫がどこか場末の飲み屋で酒と賭け事にふけている時に、彼女は夜遅くまで起きて演技の勉強をしていた。悲しみや失望や嫌悪感のあまり、彼女は慰めを求めべく、そして一時的に我が身のことを忘れるべく、自分自身を演技の勉強に駆り立てた。これら悲劇のヒロインたちは、全員みじめな境遇の身だったので、似たような立場にいる彼女にとっては心から共感できるように思えた。実際に舞台を踏む前から演技することが大好きになつた理由はそこにあつた。

ジャック・ストウエルは妻をリッチ劇場へ連れて行き、契約してもらおうとした。バーバラが普通の女性ならば、舞台監督は一座の端役と週二十シリングの薄給しか与えてくれなかつただらう。しかしながら、彼女の非凡な美しさが舞台監督の目に留まつた。彼の一座には才能ある女優が六名ほどいたが、いずれも容貌が衰えかけていた。この若い娘の美貌は——このイタリア女性のような瞳は——ロンドンの人々を惹きつけるかもしれない、客足が近頃はライバル劇場に傾きかけているじゃないか、と彼は思った。

「いいか、ストウエル」と舞台監督は言った。「できれば奥さんにチャンスを与えたいけど、大衆の心をつかむには主役で登場しなきゃならん。職業柄、演技のイロハを習得してしまうまでは信用できんからな。奥さんにゃ、まずは地方の劇場で自分の能力を発揮してもらふ必要があるぞ」

彼ら夫婦は真っ昼間にコヴェント・ガーデン劇場の大きな舞台に立っていた。しかし、劇場はほとんど真っ暗だったので、亜麻布のカーテンに包まれた大きな半円状の棧敷席は幽霊のように見え、バーバラの心胆を寒からしめた。この巨大な劇場で自分がどんなに小さな人間に思えたことか！ くすんだ下宿の姿見を前にして何度も練習したように、この舞台に立ってジュリエットやモルフィ公爵夫人の悲しみに自分の情熱を注ぐことが自分にできるだろうか？

「ジャック」と、バーバラは一緒に帰路に就きながら言った。今朝からずっと夫は異常なほど彼女に対して優しくかった。「あの大きな、暗くて冷たい劇場を見て、わたし、ホントに恐ろしい気持ちになったわ。自分のお墓の中に立っているみたいなの、そんな気がしたの」

「そりゃね、君がトンマな娘だという証拠さ」と、ジャックは軽蔑したように言い返した。「そんな大きい墓に君を入れようとする馬鹿な奴がいるわけじゃないか！」

ストウエル夫人はバースの王立劇場でデビューし、舞台監督の言葉を借りれば、自分の能力を十分に発揮し、大成功を収めた。持って生まれた情熱が彼女にあることは間違いない。それは議論の余地がない天賦の才能、というか天性のものであったので、経験不足などは問題にならなかった。彼女はこつこつと演技の勉強を続け、心魂を投げうって、この新しい仕事に全身全霊を打ち込んだ。ただひたすら演技のためだけに生きたのである。他にどんな生きる目的があるというのか？ 夫は一週間に三日も四日も千鳥足で朝帰りしていたので、妻への裏切り行為はとっくに知れ渡っていた。

バーバラは翌年の冬にロンドンにやって来て、たちまち都会の観客を心酔させてしまった。彼女が天から授かった才能と美貌、そしてその若さと純潔さはすぐ評判になった。成功を収めた最初のシーズンに、彼女は総理大臣に匹敵するほど多くの手紙を受け取った。しかし、ほどなく

判明したことだが、彼女は人の甘言に簡単に乗るような女ではなかったため、当時の洒落者や浅はかな男たちは次第にまわり付かなくなった。

それでも彼女を愛慕する者や追いかけたがる者は少なくなかった。その中に、彼女が同情を必要としているのに気づき、実際に不憫に思ってくれた男が一人だけいた。それはフィリップ・ヘイズルミアという上流階級の若い資産家——洒落者でも浅はかな男でもなく、教養のある男で熱烈な感情にあふれた人であった。

この新人女優を見た瞬間に彼は見とれてしまい、ほどなく崇拜するようになった。だが、他の男たちとは違い、彼女が理解に苦しむようなしつこい手紙や彼女の名誉を傷つける高価な贈り物でアプローチすることはなかった。一定の距離を保ちながら、沈黙の愛を心がけていた。というのも、彼女が貞淑な女性であることは直感的に分かっていたからである。しかし、彼も生身の男だったので、道義心だけで自分の欲望を抑えることはできなかった。彼はバーバラ・ストウエルの住まいを突き止め、下宿の管理人を買収し、彼女について関係者たちが知らないような情報まで入手することに成功した。

彼が聞いた話によれば、彼女の夫は卑劣漢で妻を虐待しているとのことだった。この絶世の美女は、夜は星のようにキラキラと輝いているが、昼間は悲しみと涙でやつれた、しおれた花のように弱々しい女性だと聞かされた。彼女の過去を知る前から愛してしまったわけだが、知ってしまった現在、その愛はいやが上にも増した。彼女の生活から希望を奪ったものから逆に希望を得たので、彼は道義心をかなぐり捨て、彼女を説き伏せることに決めた。

彼は以下のように自問してみた。あの女性は素性の卑しい道楽者の奴隷になっている。さらには、あんぐり口を開けて見とれている有閑階級の観客たちのお気に入りだ。女性を本来たてまつるべき家庭で夫にさげすまれ、ほったらかしにされている今以上に、彼女の暮らし向きが悪く

なることなどあるだろうか？ 一方、自分は裕福で、しっかりした人間だ——彼女と一緒になれば、明るく楽しい世界が前途に開けそうだ。彼女をイタリアに連れて行き、甘い生活の中で満ち足りた幸せに浸りながら、彼女のためだけに生き、かの地で死ねばいいじゃないか。まだ彼女の手に触れたことも、話しかけたこともないけれど、この六ヶ月というもの彼女の姿を見るためだけに、彼女の声を聞くためだけに生きてきたのではないか。彼女が頭の中で考えている事はすべて、心の中に生じている衝動はすべて、彼には分かるような気がした。彼が舞台脇の特別席で身を乗り出している時や、彼女が劇中の動きの中で近くに来た時など、こちらの存在に気づいたように思える意味ありげな表情で、あの美しい眼が時おり自分の情け深い視線に応じることもあったではないか！

もしジャック・ストウエルが離婚を願い出るようなことがあれば、それは渡りに船だとフィリップは思った。その時は、愛する人をヘイズルミア令夫人にしてやる事ができるし、そうした人生はこの上ない荣誉であることを世間に知らせることができよう。彼はバーバラにぞっこん惚れていたもので、口説き落とすことができれば、それこそ不朽の誉れになるような気がした。当世随一の美女と結婚し、うるわしき公爵夫人と暮らしていること以外は世間にほとんど知られていなかった例のデヴォンシャー公爵のように、自分自身もまた後世まで名を残すことができるだろう。

ある日のこと、サー・フィリップ・ヘイズルミアは勇を鼓して——ジャック・ストウエルの残忍な行為の話聞くことで勇気づけられ——愛する女性の前で自己紹介を試みた。最初、彼女は動揺して機嫌を悪くしたが、やがて彼の深い崇敬の念を知って怒りを鎮めてくれた。バーバラは、本当の愛がいかにか崇敬の念に満ちたものか、いかにか謙虚で慎ましいものか、生まれて初めて知ったのである。これは、断りもなく自分の所にやって来るような厚かましい女たらしではなく、自分に同情しながら

も敬意を払ってくれ、相手のためならば血を流すことさえいとわないと思うような男だったのだ。

サー・フィリップは彼女にとって赤の他人ではなかった。今日の今日まで彼の声聞いたことは一度もなかったが、毎晩のように劇場で彼の姿を見ていた彼女は次のように推測した。ころころ変わる当時のレパートリー上演目録において、同じ劇がどんなに繰り返上演されようと、彼がいつも同じ席に釘づけされたように座って観ていた理由は、単なる演劇好きからではなく、何かもっと強い感情があつてのことだろう。

彼女はサー・フィリップの愛に気づいていたし、その真剣な眼差しは彼女の心の琴線に触れていた。今まで善良な男性から愛された経験のない彼女は、彼が一生を捧げると言っているのを聞き、悲惨で絶望的な生活から助け出させてくれるように懇願する彼の控え目な声を聞き、どのような気持ちになったことか！

彼声を聞くとバーバラの心はわくわくした。そうだ、これこそ本物の愛なのだ——これまで受けたことがない人生の素晴らしい恵みなのだ。今となつては遅すぎるが、いかに大切なものを失っていたか、彼女はやっと理解できた。純金と思っていたものが、いかにひどい安びか物だったか、ようやく分かったのだ。しかし、この献身的な恋人が彼女の心に衝撃を与えるたびに、彼女は強く惹きつけられはしたものの、そうした感情は貞淑な妻としての声に常にかき消され、彼に対しては石のように冷たい態度をとってしまった。とはいえ、彼女が恋人の懇願に屈して聞き入れたことが一つだけあった。再会の許可を与えることは拒めなかったのである。時々訪問を受けてもよいけれど、それはまれでなければならぬ。正直で誠実な妻である自分に敬意を払わなかったりしたら、それは二人が永遠に別れる時になるというのだった。

「わたしの生活はとても淋しいものです」と、彼女は許可を与えてから弁解するように言った。「時たま三十分くらい会わせていただき、こ

の気ぜわしい大都会でも同情や関心を示してくださる方がおられると分かるだけで、わたしには慰めになりますわ」

彼女がサー・フィリップの願いを聞き入れたのは理由が一つあったからで、その理由が何であるか推測できていたら、彼は胸が張り裂ける思いをしたことであろう。それというのも、彼女は心の中で自分の命が終わりに近づいていることを自覚していたのである。今この時から墓に入る時まで何かに誘惑される時間はほとんどなかった。彼女はこの世に関する事柄や思いから日ごとに遠く離れて行くような気がした。夫の残虐な行為には前ほど心をさいなまれなくなっていた。ストウエル自身の道徳的な墮落は、以前は彼女にとって最大の心の重荷であったが、今では二人が別々の世界に住んでいるかのように、互いに遠ざかってしまったように思えた。舞台での大成功も、以前は彼女を夢中にさせたが、今では次々と移り行く夢のように現実のものとは思えなかった。脆弱な肉体を悲喜こもごもの現世に縛りつけていた紐は少しずつゆるんでいたのだ。この束縛の紐は彼女の疲弊した肉体からスルツと抜けそうになっていたのだ。

第二章 仇討ち

サー・フィリップはバーバラの信頼に値する人物であることを態度で示した。彼が訪れたロンドンのむき苦しい下宿は、この二十年あまり気位の高い墮落した遊び人という流浪の民たちに住まいを提供してきた大きな宿屋で、くすんだ室内の羽目板は貧困の臭いを放っているように見えた。彼が偶像視した女性に手渡したものは何かと言えば、温室栽培の花々とフルーツ、週刊紙、先人たちも喜んで読んだ薄い小雑誌、時には新刊本やロンドンの最新ニュース——ウォルポールがサー・ホレス・マ

ンに書き送った紳士クラブのゴシップ——などであった。彼は^{ダンブール}円形棒を使って刺繍している彼女のそばに来て腰かけ、敬意を込めて優しい表情で励ましたので、彼女も気持ちが和らいだ。要するに、彼のおかげで彼女は幸せを感じていたのである。

バーバラの気力がゆっくりと衰えていたにもかかわらず、彼はその変化に気づきもしなかったし、この美しい花が早晩しおれる運命にあるなどとは考えもしなかった。約束を破って彼女と頻繁に会うようになっていたために、その衰弱のゆるやかな進行に気づかなかったのだ。美人薄命と言うが、彼女の病気はその悲運に新たな魅力を加えていた。

ある日、サー・フィリップは恋人の額に恐ろしい切り傷があるのに気づいた。彼女は黒髪のおふわとした長い巻き毛で隠そうとしたが、彼の鋭い眼がその傷跡をとらえたのだ。しきりに厳しく問い詰められ、彼女は辻褄の合わない説明しかできなかった。昨晚、居間から寝室へ移動する際に、ピューッと吹き込んだ風でローソクが消えてしまい、転んだ拍子にタンスの角で怪我をしてしまったというのだ。彼女は顔を真っ赤にし、口ごもりながら事故の説明をした。

「バーバラ、嘘をついてるね！」とサー・フィリップは大きな声で言った。「その傷跡は男が握りしめた拳骨でできたものじゃないか！ あんな奴とはもう一日だって一緒に暮らさせないぞ！」

それに続く彼の熱のこもった懇願に——異国の地での楽しく明るい生活、離婚、新たな結婚、名誉ある地位——といった楽観的な提案に、彼女の心は揺さぶられた。

「でも、その前に不名誉なことが」とバーバラは言った。「恥辱の道が名誉につながるなんてことがあるのでしょうか？ いいえ、サー・フィリップ、たとえ悪から善が生まれようと、悪いことはできません」

恋人のいかなる雄弁をもってしても、彼女の決意をひるがえすことはできなかった。彼女の心はバースの大岩のように堅固だったが、彼の口

調もまた岩に打ち寄せる大波のように激しかった。最後は彼が折れて、暴君のような彼女の夫に対して憤慨しながら立ち去ろうとした。

「神の加護と慰安がありますように！」と、彼は別れ際に叫ぶように言った。「もう二度と会わないよ——君が自由の身になるまではね」

この言葉に驚いた彼女は、その意味をあれこれ考え、不安な気持ちでいっぱいになった。夫に対して何か脅迫めいたことをするつもりだろうか？ 身の危険が迫ったジャック・ストウエルに警告すべきだろうか？

ところで、サー・フィリップ・ヘイズルミアとジャック・ストウエルは、今まで一度も顔を合わせたことがなかった。彼女の夫と鉢合わせする可能性がもっとも低い場所は自宅である。しかし、このとき突然、サー・フィリップはストウエル氏と知り合いになりたい——あるいは、少なくとも彼が絶えず出入りする場所で直に会ってみたいという気持ちに駆られた。そうした場所を見つけるのは難しいことではない。この男は酒と賭け事が大好きで、決まって行く場所はロング・エーカーはずれの狭い路地にあるいか^いがわ^わしい居酒屋であった。そこでは酒と賭け事が夜の儀式と化し、友だち同士のどんちゃん騒ぎが最後は決まって流血沙汰になっていた。

とある十二月の真夜中ごろ、コヴェント・ガーデン劇場あたりの舗道が雪解けでベトベトになり、松明^{たいまつ}持ちの少年たちが褐色の濃霧の中で小銭を稼いでいたとき、サー・フィリップは芝居が終わるとすぐに、秘密を打ち明けることのできるモンタギュー大尉という親友を伴い、その居酒屋に向かった。モンタギューは非常に役に立つ男で、多くの劇場だけでなく、ほとんどの役者——とりわけ、ジャック・ストウエル——についてもよく知っていた。

「いい奴だぞ、最高に」と彼はサー・フィリップに断言した。「付き合っ^つて面白い男だ」

「そうかもしれんが」とサー・フィリップが言い返した。「奥さんをな

ぐるんだぜ。だから、ぼくが今度はなぐり返してやるつもりだ」

「何だって、フィル！ ドン・キホーテにでもなって風車と戦うつもりか？」

「ぼくのすることに口出ししないでくれ！」とフィリップは答えた。「君はストウエルとぼくを対面させてくれるだけでいいんだ」

二人がストウエル氏を見つけたとき、この男は特定の顔見知りたちと個室で——居酒屋の裏にある小部屋で——銀行というトラップの賭け事に興じていた。そこの窓は鉛板屋根に通じており、夜のお楽しみの最中に身の危険を感じたら、いつでも即座に脱出できるようになっていた。その日の食人種たちは、さながら猫のように窓から険しい屋根に登ったり、屋根の雨どいにぶら下がったりするのが得意だった。

モンタギュー大尉はストウエル氏への取次に名刺を渡し、田舎紳士の友人と一緒に彼の遊びに加わる許可を求めた。ジャックはモンタギューも人食いの仲間であることを知っていたが、その見知らぬ田舎紳士がネギをしょって来たカモであることを嗅ぎとり、「どうぞ、どうぞ」と言っ二人を歓迎した。サー・フィリップは毛皮で縁取った大きなコートと亜麻色のウィッグで変装していたのだが、ストウエルは幾らか怪訝そうな顔で彼をじろじろ見ていた。ストウエルが相手の正体を見抜けなかったのは、ひとえにブランデー・パンチの毒気による悪酔いのせいであった。

トラップ博打はやがて狂乱状態になった。サー・フィリップは田舎の大地主としてパンチ酒をじゃんじゃん気前よく注文し、「どうにでもなれ」と騒ぎながら負けて大金を失い、「夜明けまでには必ず復讐してやるぞ」と叫んでいた。それは一体どういう意味かと思ひながら、モンタギューは興味深そうに相手を眺めていた。

そのように夜が更けて行く中で、紛れもなく泥酔した様子を見せていたサー・フィリップは、酒の影響で大騒ぎしたのち、やがて涙ぼろぼろ

の茫然自失の状態になった。彼がぼんやりした物静かな態度で金を失い続けたので、ジャック・ストウエルは思わず油断してしまった。それで、この遊び人はある策略を思う存分に巡らせた気になったのだが、今のような状況でなければ、それは危険きわまりないと思われる策略であった。

この田舎の大地主が突如として立ち上がり、大きなコップに入ったパンチ酒を顔に浴びせた時の相手の驚きたるや、いかばかりであったろうか。

「おい、みんな！」と、狼狽したストウエルは顔に浴びた酒を拭きながら叫んだ。「この男は酔っぱらってるぞ。みんなも認めるはずだ。実にひどい侮辱を受けたもんだが、オレはこうした事態に便乗するような紳士じゃない。モンタギュー大尉、この友だちは早く連れて帰った方がいいですぞ。千鳥足でもまだ歩けるならばの話ですが——今晚はもう十分に遊びましたから、どうぞ」

「このインチキ野郎！ 詐欺師め！」とサー・フィリップがどなり声で言った。「最後の一時間、貴様が印を付けたトランプで賭けてたことは、ぼくの友人が証言してくれるはずだ。トランプの箱を取り替えてるのをちゃんと見てたんだぞ」

「嘘だ！」とジャックは大声で言った。

「いや、嘘じゃない」とモンタギュー大尉が応じた。「ぼくも君をちゃんと監視してたからな」

「こりゃひどい、みんな！ 決闘を申し込まずにはおくものか！」と大声で叫びながら、ジャックは剣を鞘さやから少し抜いてみせた。

「おお、やってもらおうじゃないか！」とサー・フィリップが言った。「今すぐに。野良犬のように臆病な貴様が、奥さんをなぐる時と同じように、自分の命を守ることができるかどうか、喜んで確かめてやるぜ」

「あっ、お前が誰か、やっと分かったぞ！ 毎晩、舞台脇の特別席に

座って、家内の美貌にかぶりついていた奴だな」

サー・フィリップはドアの所へ行き、錠を下ろして鍵をポケットに入れてから、諸刃の長剣ラビエールを抜いて戻ってきた。

モンタギュー大尉と他の男たちは決闘をやめさせようとしたが、サー・フィリップは頑として受けつけず、その場で片を付けると決意を固めていた。ストウエルも酔って癡狂になっており、矢でも鉄砲でも持ってこいといった権幕だった。決闘の下準備が急いでなされた。テーブルがひっくり返され、たくさんのグラスが割れたが、そのような騒音はこうした居酒屋での楽しみに付き物だったので、今回の騒動が階下にいる眠そうな給仕たちの好奇心を呼び起こすことはなかった。

決闘のために何も無い空間が作られ、二人の男は面と向かって仁王立ちし、激怒のあまり恐ろしい形相になっていた。サー・フィリップは毛皮で縁取ったコートを脱ぎ捨てるとともに泥酔のふりもやめたが、一方のジャック・ストウエルはアルコールのせいで相当ひどい状態であった。

この大根役者はなかなかの剣の腕前であったが、最初のうちは激しく無闇に突くだけで、何の効果もなかった。サー・フィリップは軽く受け流し、立ったまま軽蔑の笑みを浮かべて宿敵を見ていたので、ストウエルは気も狂わんばかりにイライラした。

「家内を賭けて言わせてもらおうが、お前たちがこの猿芝居を二人で企てたのは間違いない」と彼は言った。「悪だくみが着々と進んでたことに、もっと早く気づくべきだった！ 家内が従順で、話し方も可憐だったもんだから、まさか——」

ジャック・ストウエルが発しようとした言葉はそこで途切れてしまった。というのは、フィリップ・ヘイズルミアの剣から第三の構えティエルスで急に放たれた突きが相手の右肺を貫き、永久に沈黙させてしまったからである。

「今朝、貴様の拳骨の跡を奥さんの額の上に見たとき、ぼくは今晚にも奥さんを未亡人にしてやろうと誓ったんだ」——相手の役者が砂をまいた床に顔から倒れると、サー・フィリップはそう言った。

ほどなく居酒屋の給仕たちのドアをたたく音が聞こえた。階下で静かにしていた彼らでさえ、ジャック・ストウエルが倒れる音に驚いたのである。テーブルやグラスがたたき壊されても、普通は何も言われぬ——壊れた分だけ勘定がふくらむだけの話だった——が、人間の体が倒れたということで注意を引いてしまったようである。モンタギュー大尉は窓を開け、その下のツルツルした鉛板屋根の上に親友を押し出した。急いで降りたので生命と手足に多少の危険を伴ったものの、サー・フィリップ・ヘイズルミアは気がつくやうにロング・エーカーに来ていた。夜の見回りが「四時過ぎ——雨の朝——」と叫んでいた。

第三章 虫の息

翌日の夕刻前に、ロンドンの人々は役者のジャック・ストウエルが居酒屋での喧嘩で殺されたということを知った。モンタギュー大尉は「沈黙は金」だと言って、ストウエル氏の友人たちを買収していた。この男は規則に従った決闘で殺されたのだから、その目的の詳細を警察に知らせても何の役にも立たないではないか。それで、中央警察裁判所の治安判事が尋問に来て、この重大事件については支離滅裂な説明しか聞き出せなかった。賭けトランプの最中に喧嘩が始まり、ストウエルとその場にいた誰も名前を知らない別の男とが、それぞれ剣を抜いて戦った。ストウエルが倒れ、もう一人の男は居酒屋の給仕たちが助けに来る前に窓から逃げてしまった。逃げた男は亜麻色の髪の毛で、灰色の毛皮で縁取った深緑の乗馬用コートを着ていたが、逃げる姿を見た者は一人もい

ない。治安判事は全員が酔っ払っていたという総括的な結論を下した。この尋問は徒労に終わったわけだが、昨今であれば日刊紙の抗議社説や、「正義は行わしめよ」とか「ベッカム・ライより」とかいった手紙が抗議の切っ掛けを与えただろうが、のんきな当時のことだから誰の注意も喚起しなかった。ウォルポールの不朽の書簡集に段落を一つ提供するくらいが関の山だった。

サー・フィリップがストウエル夫人の下宿を訪れると、彼女は病気で部屋に閉じこもっていた。コヴェント・ガーデン劇場では出し物の変更が告示されており、この花形役者は「家庭の不幸により一週間後の明日まで」お休みとのことだった。

サー・フィリップはいつもの贈り物としてストウエル夫人の住所に温室栽培のフルーツと花々を送ったが、殺された役者の亡骸が下宿に安置され、若き未亡人が配偶者の壮絶な死のために憂鬱な気持ちになっているということで、控え目で細やかな心づかいから彼女には近づかないようにしていた。おそらく彼女は彼が手を下して夫の時ならぬ死を招いたと疑っているだろう。彼女は哀れに思っただけで赦してくれるだろうか？ 剣を抜いたのは、彼女が受けた虐待に報復するためだったことを理解してくれるだろうか？ この点についてサー・フィリップは楽観的に考えていた。自分たちの将来には希望と期待が持てるに違いない。疑いを受けているから、しばらくの間は関係を断たねばならないが、今はそうした陰鬱な時を耐え忍んでいけばよいのだと思った。

バーバラが病気で部屋に閉じこもっていると考えても、彼はそれほど不安にならなかった。夫の死に動揺して完全に参ってしまったのは当然なのだから。暴君から解放されたことに気づけば、やがて気が楽になって希望を持つだろう。その間、サー・フィリップは彼女が舞台に復帰するまで、あと何日必要かと指折り数えていた。

とうとう彼女が劇場に復帰する夜になった。再演として告示されたの

は『モルフィ公爵夫人』第四幕まで——公爵夫人役はストウエル夫人」で、それはウェブスターの劇である。当時は悲劇が好まれていた時代で、陰鬱な劇であればあるほど結構だった。コヴェント・ガーデンは自殺や殺人の場面を見せるには持ってこいの広い納骨堂のような劇場であった。

サー・フィリップはヴァイオリン奏者たちが演奏を始める前から特別席にいた。花形女優がしばしの休養を経て復帰したにもかかわらず、そして一週間前に謎めいた状況下で死の憂き目に遭った男の未亡人として、彼女が観客の関心を引くように作為的な戦略がとられたにもかかわらず、劇場の半分以上は空席であった。劇場の外はひどい天気——褐色の濃霧だったからである。霧の一部はコヴェント・ガーデン劇場の出入口から中に忍び込んでおり、棺桶にかける黒布のように一階席や特別席に垂れこめていた。

ヴァイオリン奏者たちはグルックの『オルフェオとエウリディーチェ』の序曲を演奏し始めた。フィリップ・ヘイズルミアの心臓の鼓動が大きく速くなった。カーテンが早く上がらないかと待ち焦がれ、じれったい気持ちを抑えることができなかった。もう一週間以上もバーバラ・ストウエルの姿を見ていない。最後に会ってから二人の運命に、なんと劇的な変化が起こったことか！ 今なら意気揚々と喜んで彼女に会うことができる。二人の仲に水を差す大きな溝はもはやない。彼女が愛してくれていることも、こちらの願いを喜んで受け入れてくれることも間違いない。ほんのしばらくの時間——世間が納得するために一定の時間——が経てば、彼女は妻になってくれるはずだ。ロンドンの観客が、こうしてギラギラ光る照明の下で、彼女の姿を見ることはもう金輪際ないだろう。これからも彼女は星として輝くだろうが、それは天国のように穏やかな自分の家庭の中だけである。空席が目立つ劇場と黒いマントのように垂れこめた霧が生み出す憂鬱な思いは、そうした明るい未来の予想図によ

って追い散らされた。

カーテンが上がり、とうとう彼女の姿が見えた。美しい眼は前よりも光かがやいていたので、その青白い頬がやせこけているのに彼は気づかなかった。彼女の表情はどれもゾクゾクするような悲劇性を帯びて、それは天才だけが放つ香気と情熱によるものに見えた。舞台に立って千辛万苦の過去を吐露している人物は、無情で残忍な男たちから虐待と抑圧を受けた、罪のない無力な犠牲者であった。なじみのない話、なじみのない人物であっても、彼女の解釈によってどれも自然に見えた。サー・フィリップは、この陰鬱な劇を（実際、台詞はすべて聞き慣れたものであったが）一度も観たことがないかのように、全身全霊を傾けて見入っていた。モルフィ公爵夫人はバーバラが独自に解釈して創造した役柄の中でも最高の部類のものだった。

サー・フィリップは彼女が発する言葉にうっとりしながらも、一語たりとも聞き洩らすまいと集中し、青白い顔をした彼女の美しさを食い入るように見つめていたが、劇が早く終わることを同時に待ち望んでいた。彼は舞台脇のドアの所で待ち伏せし、彼女のお伴をして下宿へ戻るつもりである。そして、自分たちの幸せな将来について語り、黒の喪服の片づけが済み次第すぐに結婚するという約束がもらえるまで一緒にいるつもりであった。彼女のためなら根拠のない世間の偏見ですら敬意を払おう、彼女を虐待した夫に対する形式的な服喪の間はじっと待っていようと思った。

劇はゆっくりと進行し、最後の恐ろしい第四幕では恐怖の場面——狂人たちが踊り騒ぐ仮面劇、墓職人、弔鐘を鳴らす男、葬送歌、棺桶と絞首紐を持った死刑執行人たちの場面——が陸続と展開された。バーバラの顔は亡霊のように青白く、影のように淡く見え、この世の束縛から逃れてしまっただけで死などには恐怖を感じない人間のものであった。劇場の客はまばらであったが、カーテンが降りる時には拍手喝采の嵐が起こった。

今にも死にそうな彼女の顔を見たサー・フィリップはその場に釘づけとなり、立ったまま濃緑の虚空を見つめていた。他の観客たちは薄暗がりの中で道案内してくれる松明持ちの少年や貸し馬車を見つけられるかどうか心配しながら、急いで劇場から出ようとしていた。

サー・フィリップは突然すぐ背後で溜息——彼がギョッとし、悪寒を覚えるような溜息——が聞こえたので振り向いた。そこに立っていたのはバーバラだった。あの最後の場面で着ていた衣装——痛ましくも彼に死を連想させる経帷子きょうかたびらのような衣装——を着たままであった。彼女は悲しく訴えるような仕草で両手を彼に差し出してきた。彼は真剣な表情で身を乗りだし、両手で握りしめようとしたが、彼女は身を震わせて後ろへ退き、舞台の戸口の陰で幽霊のように立っていた。

「いとしいバーバラ！」と、彼は驚きと喜びの中で叫んだ。「ぼくは舞台脇のドアまでやって来たんだよ。君はもう自由にぼくを世界一幸福な男にできるんだ。一刻も早く君と話がしたい。愛を確かめたくてたまらないよ。ねえ、君、甘い言葉で話したいことがたくさんあるんだ。そばに行ってもいいよね？ 君の馬車に乗って一緒に帰宅してくれるかい？」

このように彼が真剣な表情で息もつかずに話していると、突如として照明が消えた。もう一度、彼女は前よりも小さな、半ば哀れを誘う、半ば愛情のこもった溜息をついて、彼のそばから去って行った。彼女は一言も発してくれなかったが、この優しい沈黙を彼は承諾の証しとして受け取った。

サー・フィリップは手探りで真っ暗な劇場から出ると、ぐるりと劇場の楽屋口まで回って行った。そして、その出入口には立たず、バーバラの馬車と呼ばれるまで、慎重を期して狭い通りの反対側で待っていた。これまで何回も彼女の出待ちをむなしく漫然としながら夜を過ごした経験があるので、彼女の行動についてはよく知っていた。

夜霧のカーテンにおおわれた街路には二台の貸し馬車が待機していた。ほどなくメラメラ燃える松明を持った一人の少年が急ぎ足でやって来たかと思うと、それに続いて褐色のコートを羽織って同じ色のウィッグをつけた紳士が息を切らして現れた。松明持ちの少年は道路を横切り、その後を紳士が追いかけて、二人とも劇場の中に姿を消した。

息を切らした紳士は何の用があるのだろうかとかサー・フィリップは何気なく思った。

彼はしばらく待っていたが、イライラしていたので非常に長い時間に思えた。それでもなお、ストウエル夫人の貸し馬車を呼ぶ声はかからなかった。役者の一団が外に出て、何か熱心に話しながら、反対側の舗道を歩いて行った。それから褐色のコートを着た紳士がまた出てきて、松明持ちの少年に先導されながら、小走りで霧の中へ消えて行った。劇場の楽屋口の守衛が敷居の所に姿を現わし、通りの左右を見渡してから、ほの暗いオイル・ランプを消して夜の戸締りをしているように見えた。サー・フィリップ・ヘイズルミアは走って通りを渡り、なんとか守衛を呼び止めることができた。

「どうして戸締りするのかね？ ストウエル夫人はまだ劇場から出てないんだろ？」

霧の中で彼女の姿を見失った可能性は十分にあった。

「そうじゃね、かわいそうに、明日まで出てくることはねえが、明日になりゃ、足から先に運び出されなざるぞ」

「何だって！ どういう意味だ？」

「あんな別嬪べっぴんさんにとっちゃ、悲しすぎる最期じゃった」と、守衛は溜息まじりで答えた。「あの獣のような旦那の虐待が原因だったんじゃ。そうに違いねえ。この三ヶ月というもの、別嬪さんは肺の病で具合が悪かったんじゃ——あっしら、みんな知ったよ。今晚、この楽屋口に来なすった時にゃ、舞台よりか棺桶にふさわしい顔色ですぜって、そう

言ったんじゃがね、わしは。で、カーテンが降りた瞬間にボタンと倒れなすった。唇から一筋の細い血がにじみ出とったよ。白い衣装にポタポタしたたってた。化粧部屋へ運ぶ時にゃ、もう事切れていなすったよ。ヘンリエッタ通りのバッド医師を呼びにやったんじゃが、もう遅すぎた。医者たちが救い出そうにも、それが待てなかったんじゃね」

そうだ、サー・フィリップが彼女の幽霊のような顔をのぞき込み、あの悲しそうな眼が口では言い表せない愛と憐れみを込めて彼の眼を見つめているのに気づいた時に、バーバラの苦難に満ちた魂は天高く飛び去っていたのである。

【原典】

Mary Braddon, “Her Last Appearance” (*Belgravia Christmas Annual*, 1876).

『中国漢字文化大観』

(北京大学出版社1995年 何九盈、胡双宝等)
〈第九章 (二)〉 (齊冲天)

趙 晴 (訳)

漢字と書道

書道は、漢字を単に「書く」ものから「書道」という芸術へと昇格させた。漢字の点画すべてに、音義を表すということ以外に、芸術への拘りを持たせたのである。例えば、顔(真卿)体字の点はとても太いが、それに対して柳(公権)体字は細い。顔体字の点を柳体字で書いたら、明らかにバランスが悪くなる。また書道の芸術的な拘りは逆に漢字の形と書写規則を左右していた。即ち、漢字は芸術化された文字である。両者はお互いに高め合い、一体となっている。

1、方块(四角な固まりの文字)の形成

書道とは何か? 文字の筆画と構造を力強く書けば書道になる。良い書とは何か? 宋代の朱熹は筆力が十分であれば、皆良い書だ(『朱子語類』卷一四〇)と言ったことがあるが、その通りである。

かねてから筆力と書勢(筆勢)は書道に重んじられている。例えば現存の最も古い系統的な書道理論書の書名は『四体書勢』であり、専ら書勢について書かれたものである。古文、篆、隶、草の四つの字体に分けて、それぞれの書勢が述べられている。『新唐書・顔真卿伝』には「筆

力はたくましく美しい」と顔体字の芸術性を称え、『旧唐書・柳公権伝』には「力強く柔らかく、自ら一家を成す」と柳体字を称えている。現代になっても、字は力強く、動きがあるように書かなければならないと、人々は言っている。簡単で通俗的な言い方だが、書道の本質に触れている。文字自身は「有力」も「無力」も「有勢」も「無勢」も、何であれ、字の意味が分かれば生き生きとした字が書けるのである。動きがある字、生命力を感じる字、龍や鳳凰が宙を舞うような、風や雲の変化でさえ感じさせられる字であれば、芸術になるのである。

文字はコミュニケーションの手段として用いられている。それは符号的で、物質的なものである。それに対して書道は芸術であって、鑑賞できる美であり、精神的なものである。文字はきちんと正確に書くための規範の字形があるが、書法は意表を突いたもので、ありふれた形でないことが求められている。書法は文字書写の芸術であるため、独創性と正確性の調和というものが常に必要とされている。文字の役割は思想を記録し、文化を広めることであり、普遍性と歴史安定性を持っている。よってたとえ二千年も前の漢字でも分かる。それに対して書法は筆力を重んじている。字義を尊重し、字形の筆画に力と勢を感じさせる。より生き生きと描き、元気や喜びを我々に力として与え、美的な感銘を覚えさせるのは書法の役割である。したがって時代を表すものでなければならず、個人の特徴や風格、そして自分らしさが常に求められており、絶えず新しく発展させなければならない。即ち、文字と書法は本質的に異なっているが、いつも結びついてお互いがお互いを輝かせている。これは道具と芸術の結びつきであり、二つの知恵の結びつきである。

芸術への道

漢字は象形文字を基礎として、数百の象形文字を組み合わせて、数万の形声文字と会意文字になる。象形文字は生命と情態を表現していて、それが即ち芸術への道だといえよう。所謂「書画同源」とは、書と画は本質的に違いがあるが、しかしその始まりが物象によるという点において、両者は共通点を持っているということである。「山」の字形は真っ直ぐそびえ立つ形であり、「水」は通り抜けて流れる形であり、鳥、獣、虫、魚の字はそれらの動き（仰向ける、ひれ伏す、体を横にする、立つ、走るなど）を表す。初めは文字の形体に力と勢を加えていたが、その後、書法は具体的な物象を取り除き、筆力と筆勢を発展させ、筆画の「曲直伸縮」だけで力と勢を表現するようになったため、物象の動静の態勢とはだいぶ違ってきた。「曲」は柔らかく、「直」は真っ直ぐ。柔中剛あり、剛と柔の調和がとれている。「伸」は氣勢が果てしなく、「縮」は止まり、力を中に隠している。これらは全て筆力の表現である。このように、「曲直伸縮」は全て芸術になる。構成の面でも平穏性と奇抜性を合わせ、陰陽開闔のバランスがとれていて、文字はそれぞれの形になっている。この時、象形文字の物象を表現するという観念は段々と薄くなり、字形の筆画化によって、統一性に拘るようになってきた。したがって筆画と構成の変化は象形の意味を壊してしまったのである。例えば「魚」の字は既に魚に似ておらず、「燕」の字も燕の姿と大きく異なってしまった。「豕」の字の最後の二画は、もともと上がっているしっぽだと誰も分からなくなった。「人」の字は手や足の形が全くなり、「日」の字で表現している太陽は長方形になった。

文字のことを最初は「文」と言った。『説文解字』に「錯画なり。交文に象（かたど）る。」とある。即ち入り組んでいる筆画だという意味である。それは「文采」の「文」は「花紋」の「紋」と共通している。

筆画の「画」はもともと「劃」と書いていた。錐刀は「画」といい、刀で物を画くことも「画」という。したがってそれは絵画の「画」も共通している。文であり画である。語源から見れば、文字は最初から芸術に結びついていたことが分かる。

さらに文字の起源を見てみると、文字はまた芸術になりやすいといえる。『説文解字』に「黄帝の史、蒼頡、鳥獣の跡を見て、分理の相ひ別異すべきを知るや、初めて書契を造る。」とある。衛恒の『四体書勢』にも各字体を説明する前にまず鳥跡から啓発を受けたと書いている。「彼(か)の鳥跡を写し、以て文章を定(さだ)む」、即ち文字及び芸術の栄光は鳥跡を真似して描くことから得られたという意味である。その後の書法理論書にもこのような論説がよく見られる。文字は長い狩猟採集時代に生み出されたもので、当時の生産方式、労働知識、芸術創造と緊密に関連している。書法は文字の創造初期に既に萌芽があった。当然、その時期はまだ幾つかの簡単な形式美しかなかった。例えばきちんと整っている、バランスがとれている、行、列があるなど。高度な芸術発展と理論に関しては、文明成立期になってからのことである。

書体と書法

書体は字形の問題であり、書法の問題でもある。

甲骨文字以後、漢字は三大書体の発展過程をたどった。即ち、篆、隸、楷である。行書と草書は字体ともいうが、しかしそれらは三大書体を基礎とし、その上に変化してきたものである。例えばいま現在の所謂行書と草書は実は楷行、楷草である。隸書は隸行と隸草(或は草隸)があり、章草も隸書の特徴を持つ草書である。篆書の資料は欠けていたが、同じように推測すれば、篆行か篆草もあると思われる。そのため、行書と草

書は篆、隸、楷の三大書体と同一に論ずることはできない。篆、隸、楷にはまたそれぞれに幾つかの区別と小さい分類がある。例えば篆は大篆と小篆に分け、隸は秦隸と漢隸（さらに正しく言えば、秦と西漢の隸、東漢の隸）に分かれている。魏碑については、また少し特別である。魏碑は楷書に属しているが、実は隸書の特徴を持ち楷書である。それは隸から楷への過渡期の楷書で、一般概念上の楷書と異なっている。故に専ら魏碑という。たとえ北朝の碑でも、隸の特徴はだいぶなくなったが、それでも後の楷書と同じではないのである。

各字体の代表的な書法の作品、即ち各字体の典型字形は、殆ど碑文によって保存されてきた。我が国の現存する最古の文字石刻は石鼓文である。基本的に大篆に属していて、とても規範的で、きちんとした古文字である。それよりもっと古いものは青銅器に鑄造された銘文であるが、運筆などは弁別できず、文字の構成のみが分かる。古樸で自然な形の字が殆どであった。小篆に関しては、その代表作は間違いなく始皇帝時代の六つの石刻である。石鼓文と秦の石刻は両者とも厳密で、優美で、きちんとした形の書法であって、書法の宝である。いま現在に至っても、極めて大きな芸術的魅力をもっている。

隸書の代表作は東漢の数十個の有名な碑銘だといえよう。それらの芸術的風格はそれぞれ異なっている。清末以来、我々はこれまで漢代の竹木簡、帛書を何度も発見した。それは筆で木簡或は帛上に書いたものである。特に1972年山東銀雀山で発見された西漢竹簡は、秦の篆書から漢の隸書までの変化をよく知るには、実に重要であった。例えばその中に『孫臏兵法』の写本があるが、篆書の丸みと隸書の四角さの両方の特徴があり、幾つかの字形はまだ小篆のままであった。一つの字形の変化は少なくとも数百年かかるため篆書から隸書への変化は、秦（或はさらに前の戦国中後期）から西漢までの期間がその過渡期となっていた。このように考えれば、隸書は小篆から変化してきた、とは限らないと思う。

小篆と秦の隸書はおそらく両方とも大篆を継承し、前者は字形が丸く、後者は形が四角い。両者は並行して発展してきたのであろう。小篆は国家が規定した通用文字であるため、秦の隸書の中に時には小篆の字形も現れたが、数百年の文字書写の試練を経て、隸書は小篆に代わって漢字通用字体になった。その上にさらに美しく進化し、蚕頭燕尾（起筆は丸く蚕の頭のように、右払いの収筆は燕の尾のように）という形になり、隸書を全盛の時代—東漢に邁進させたのである。

人々はしばしば鐘繇と王羲之は偉大な書家というが、実は彼らは楷書文字の発展にも大きな功績があった。唐代の楷書家は芸術の面では絶えず新しいことを生み出してきたが、字形の面では鐘繇、王羲之の楷書法則を厳しく守っていた。例えば、天下第一楷書の手本だと称されている欧陽詢の『九成宮醴泉銘』（図一）の「九成」の二文字は完全に王羲之の『黄庭経』の中の「九源」の「九」、「其成還帰」の「成」の手法を継承し、迫真のでき栄えである。隋唐時代にも、智（永）、虞（世南）から顔（真卿）、柳（公権）まで、彼らの書法碑帖の中にもし鐘、王と同じ字形や筆法が幾つかでもあれば、当時はおそらく美事として称賛されていたであろう。

鐘繇と王羲之の楷書に、隸書の趣は色濃く含まれている。書法から字形まですべてがそうであった。例えば、扁平な形の字はとても多く、それは隸書の横にする形を保っていた。唐楷になった頃には、文字の形はようやく正方形の形になった。また鐘、王の楷書の払いは、隸書の払いがよく使われている。運筆は一定の速度をもち、上がりの波礫がある。例えば『黄庭経』の「疾」の字の三画目がそうである。唐楷にも偶に隸書の特徴が見られるものがある。例えば『九成宮』の「疾」の字は、『黄庭経』の「疾」の字と全く同じ形であって、払いの大小の違いのみである。しかし総体的に見れば、唐楷は既に成熟した楷書であった。千年余りの間、楷書はその歴史的安定性を極めて発揮し、現在に至っても我々



图一 欧陽詢『九成宮醴泉銘』

の理想的な交流手段であり、そして極めて高い水準に達した書写芸術である。

宋代、元代になっても、行書はずっと流行っていた。書法界は王羲之の『蘭亭序』を天下第一の行書として公認し（図二）、また顔真卿の『祭侄稿』を天下第二の行書と称えた（図三）。『蘭亭序』は隸書から離れたと思われるが、筆者はそうではないと考える。王羲之の楷書と比べれば少し隸書の特徴は薄いですが、『蘭亭序』も隸書の趣をもっている。上述のような特徴は『蘭亭序』にも見られて、「豈不痛哉」の「痛」の字の三画目は払い、収筆のところに波磔があって、上述した「疾」の字と書き方は一致している。このような払いの書き方は特別な例ではなく、数えてみれば、『蘭亭序』の中に十五ヶ所以上にもある。後の『蘭亭序』を学ぶ人々はこのような払いの書き方を継承せず、変通自在にした。そして『蘭亭序』に見られる例の少なくない隸書の丸いはねも、楷書の書き方ではなかった。

楷書、行書を主な字体としての書界は、千年以上経っても晋唐の字を推賞し、王羲之と顔真卿の字を推奨している。王羲之の字は流麗であり、顔真卿の字は力強く、書法界の二大流派である。歴代優れた書家は殆どその二大流派のどちらかであった。「力強さ」は力と勢の表現に拘り、それに対して「自然さ」は力と勢を字の中に秘めているということである。したがって書法は活力に満ちあふれている芸術であって、明るく、活発で、空に舞うような素晴らしい美の芸術である。力強く、生き生きとしていなければ、この芸術を扼殺してしまう。「緩急があり、曲直があり、隠出があり、起伏がある、そのような字こそが書だといえる」と、王羲之は語ったことがある。また『書論』の『題衛夫人「筆陣図」後』に「若し平直相似し、状は算子のごとく、上下方整、前後平直、便（すなわ）ち是れ書にあらず。但（た）だ其の点画を得るのみ。」とある。「但だ其の点画を得るのみ」となれば、何になるであろうか。即ち書法では

なくなり、文字だけが残るのである。故に書法は筆画と構造に多くの変化を要求される芸術である。文字は歴史的安定性と規範化を求められるが、書法は常に新しい芸術性を要求される。両者は一体化し、矛盾を高度に統一したものである。三千年の間に、わが民族は文字と書法に計り知れない心血を注ぎ、素晴らしい知恵を発揮してきた。道具と芸術を合わせたこの成果は極めて大きいのである。

草書、特に大草体は、普通の人には読めない。殆どは交流の道具として用いられないが、芸術としては絶えずその限りない境地を積極的に求め続けている。書家と草書の規則を知る者にとって、書法と文字は依然として一体化している。文字でなければ、草書も存在しなくなるであろう。所謂「草書は規範の中におさまっていなければ、仙人でも読めない」のである。しかし、草書の中には間違いなくより多くの芸術的な追求があつて、筆画や構成、配置などの面ではさらに大きく変化し、奥深くなっている。草書は書法思想を高度に発揮した表現である。書法の中で、何故草書を発展させたかという、初めは実用のためであつて、実際の書写経験の積み重ねであつたが、その後は即ち芸術的な知恵の発揮になつた。草書の芸術的魅力は素晴らしく、称賛する者の中に、真の鑑賞をしている者もいるが、ただ崇拜のみという者もいる。彼らは草書の文字は読めず、その奥深さを分らないが、ただ草書を好きで、よい書だと思つている。

草書も晋唐では最も盛んであつた。伝統的な作品は王羲之の『十七帖』



図二 王羲之『蘭亭序』



図三 顔真卿『祭侄稿』

である。後の書法の多くはそれを厳格に守っている。唐の時代に二人の大草体（若しくは「狂草体」という）の大書家がいた。それは張旭と懷素である。彼らは一人は「張顛」といい、もう一人は「狂僧」と称し、実に自由奔放であった。彼らはお酒を飲み自由に駆け回り、実は血をめぐらせながら構想を練っていたのである。飲んで走った後、彼らは思いのままに筆を走らせて、紙一面に書き、一瞬で作品を生み出す。

漢字の形体に、積み重ねてきた美の重さがある。それは負担ではなく、高度な文化の現れである。

2、基本筆画の発展

漢字の構造を分析すれば、二つの種類がある。即ち、六書と基本筆画である。六書は言語の音義と緊密な関連がある。発音と意味の両方を取る場合もあるが、発音と意味のどちらかを取る場合もある。基本筆画は原則的に発音も意味もなく（独立した文字として用いられる時のみ、発音と意味がある）、書写と字形を分析する際の基本単位である。歴史発展の順序から見れば、六書は先にあって、安定的に存在している。それに対して基本筆画は逆に何度も変化を経て次第に形成されたのである。

文字の分析に対応して、書法も二つの芸術の合わせである。即ち、筆法と構成である。

甲骨文では、一つの文字の偏旁（形旁或は声旁）とその筆画は決まっていなかったりある。例えば「逐」の字の偏旁は「豕」であるが、「犬」、「兔」、「鹿」などになる時もあり、どんな偏旁でも同じ「逐」の字である。「鹿」の字の「角」も画数は多くなったり、少なくなったりしてもかまわず、安定せず正確性に欠けていた。この現象は文字が原始時期に近い頃であったことを表している。

篆体字、特に小篆になった頃は既に規範となっていた。篆体字の基本的な筆画は三つ、即ち、点、直、弧である。筆画をだいたい二種類に分けられるということになる。「直」というのは縦横や傾斜の角度もすべて含めて、みんな「直」と称する。「弧」の形体はさらに多く、上に向く弧、下に向く弧、左や右に向く弧などこれらは皆単一の弧である。それから二、三画で方向や角度の異なる弧で一筆になった「复弧」がある。例えば「弓」の字、上の横画は弦を表し、下の弓の形を表す部分は折れ曲がった複合した弧である。ほかに「己」の字も一筆につながっている。だから「复弧」の数も少なくない。それから円状筆画もあって、例えば「口」偏の字（即ち「囗」や「凵」偏の字である。篆体字の基本筆画は三つしかないが、実は粗略な分類であって、実際に書く時は、二、三画で一筆になることはよくある。

篆体字の基本筆画は弧を主としている。そのため筆画上では芸術的に柔らかさの中に強さがあることが必要とされている。『書断』は李斯の小篆を「筆画は鉄石のように硬く、文字は動いているように見える」と称賛している。鉄石は強くて硬いが、柔らかく見えて、このような筆画を合わせれば、文字は飛び舞うようになって、芸術的な境地はさらに高くなっている。

隸書になると、多くの弧が平直に変わり、複合的な字画は短く分割され、そして筆画の方向が殆ど左から右へととなったため、非常に書きやすくなった。

楷書の基本筆画は横画、縦画、左払い、右払い、勾、点、転折などがある。それらは隸書に既にそろっていた。楷書と隸書の一つ大きな違いは波磔と長い横画の部分である。隸書の横画は波勢となっていて、一つの文字の中に一筆「蚕頭燕尾（起筆は蚕のように丸く、収筆は大きな払いが燕の尾のようになる）」があり、波勢と合わせると起伏があって、長い横画も加えれば、非常に書き心地がよく、筆勢があり、力も文字に込められている。隸書はまた面白い規則があって、つまり上述のような「蚕頭燕尾」は、一文字に一筆しか使えないことである。むしろ一筆もない方がよく、二筆あるとそれは「病」であり、タブーを犯したことになり、間違いになってしまう。したがってほかの筆画は控えめに書かなければならなくなり、それによって伸縮性、本末の理論は形成されたのである。このことは芸術思想上においては深い哲学的な意味があって、芸術実践上でもたいへん成功したのである。何故なら、もし同じ筆法を使えるなら、二筆は重複になってしまい、どこでも伸ばして書いたら、それは伸びがないのと同じで理想ではなくなってしまう。即ち、これは隸書の初めの頃の「払いは重複してはならない」という規則であった。詳しく言えば、一文字に二回の払い、二回の長い横画はあってはならない。払いと長い横画も一回しか書けないということである。とにかく一筆だけ思う存分に伸び広がって、他の筆画はすべて控えなければならぬ。清の人が書いた『書辨』に払いを重複する字も多くあったが、しかし有名な碑石や規範的な隸書の作品では、例外なくこの規則を厳格に守っている。これを考えれば、一定の模索と探求する時期を経たからこそようやくこのような芸術的な理論にたどり着いたと分かる。書法をこのようにしたので、文字の形体もこのように固定されてきて、規範となった。隸書だけでなく、楷書も「払いと長い横画は重複してはならない」という規則を忠実に継承した。王羲之の『黄庭経』に払いは重複している字が一つあった。それは「扶養」の「養」の字である。「養」の下側

の「食」の字の二画目は払いであるが、最後の一筆も払いになっている。たとえ王羲之でも、これは間違いだと認識されるべきで、或は不注意であったと思われる。王羲之を批判する人は極めて少ないが、しかし王羲之の字を学ぶ多くの人々の中に、この払いが重複した「養」の字を学ぶ人はいなかった。現在、我々はよく払いを二回以上書かれる字を見るが、それは規範的な字ではないと認識されるべきである。

篆書から隸書までの過程は基本筆画の大変革であったが、隸書から楷書までは、部分的な修正をただけで、基本的な形は既に決まっていた。

楷書の基本筆画は横画、縦画、左払い、右払い、点、かぎ（鉤）、はね（提）、そり（弯）、おれ（折）などがある。

二、三十以上の筆画があると書いている学習書もあるが、実は二、三の筆画をつなげて一筆になるものが多く、そのため、上述したような基本的な筆画に全部含まれている。例えばそりとおれの違いはただつなげる方法が異なるだけである。「口」の字の二筆画目は、横と縦を四角いおれでつなげているが、それに対して「孔」の字の末筆は、横と縦を丸いそりでつなげている。

細かく分ければ、横画、縦画、左払い、点はみんな長さの違いがある。例えば「水」の字の最後の二筆画目、「啄」とも呼ばれていたが、実は短い左払いである。

右払いは長さの区別がない。隸書と魏碑の中に幾つかの短い右払いはあったが、隋唐の楷書の中にはすべて長い点、若しくは短い点に変わった。

左払いは長さの区別だけでなく、横左払いと縦左払いの区別もある。例えば「委」の字の最初の筆画は所謂横左払いで、「広」の字の三筆画目はつまり縦左払いである。

縦画は「懸針」と「垂露」に分けてある。収筆のところが、「懸針」は真っ直ぐとがっていて、「垂露」は上にはねる。

そりは横そりと縦そりがある。「戈」、「成」などの字のそりは縦そりで、

「心」の字のそりは横そりである。

篆書、隸書の基本筆画と比べれば、楷書の基本筆画の風格は平直、簡潔、明快であり、すべてが左から右へ、上から下へと書くので、非常に書きやすい。これは世界の文字の中でも独特な風格を備えている。

隸書と比較すれば、楷書の基本筆画は多くの発展があった。例えば横画、篆、隸、楷はそれぞれ異なっている。「一」の字を書く時、篆書は真っ直ぐで水平線と平行している、隸書は波勢があってはねる、楷書は波勢をなくして（個別の書家の個人風格を除く）、欹勢を発展させた。小学生が習字手本のなぞる練習をする時、最初の字は「一」である。その「一」は左下から少々右上に欹て、欹勢を取って書くのである。勢があれば、即ち書法があるということになる。顔、柳、欧、趙（孟覲）の字の手本には水平の横画が多くないのである。

楷書の点は隸書の点よりだいぶ種類豊富で生き生きとしている。例えば散水法、三つの点はまったく異なっていてお互いに引き立て、三点目は長く書くが、隸書の三点水は似ているのである。簡体字は楷書の点をさらに増やした。例えば「対」、「风」、「兴」、「金」などの字の点は、その多くが長い点である。

楷書の勾と隸書の勾は根本的な違いがある。篆書には勾がなく、その幾つかの弧は隸書になった頃に勾に変わった。隸書の勾は長くて曲がっていて、数は多くない。例えば于、刀、弓、子など。楷書の勾は、一部は隸書の勾を保持した上に改造したものである。多くは筆意を表すために筆画の末端に次の筆画の位置に勾を書き、筆画の間の「形は離れているが、意はつながっている」という意味を表している。「一」の筆画の末筆に勾を書くなら、その字の内側に向くように書く。例えば「門」の字、「行」の字に勾はないが、書く時は末筆に内側に向く勾を書き、それによって楷書の筆勢は内向きと外向きを結びつけている。それに対して隸書の筆勢は殆ど外向きである。亦、赤、示、架、南、馬、鳥などの字は、篆書

と隸書に勾はなかったが、いまはみんな内向きの勾があるようになって、楷書の内向性が増したのである。楷書の勾の形は短く、筆峰は力強く、隸書の勾と性質、由来、形体においてはすべて異なっている。

楷書の「提」(浮かし)は隸書になかった。左側の偏旁の末筆は横書であれば、みんな「提」で書く。何故そのようにするのかというと、それも筆意の「形は離れているが、意はつながっている」という整合性を表すためである。横書きと提の区別は、提は早く運筆して、峰を作りながら次の筆画の位置を指している。提は、形声字と会意字の左右の偏旁の関連を表している。

楷書の左払いと隸書の右払いも大きな区別がある。楷書の左払いも提と同じように運筆し、峰を出すのが、違うのは、左払いはみんな上から下へ、右から左へ書き、それに対して提は左下から右上へ書くのである。隸書の左払いと右払いはだいたい左右対称になっているが、楷書はいつも対称をわざと打破するように、左払いは起筆が強くその後軽く、右払いは起筆が軽くその後強く書く。

上述のようなことから分かるように、楷書の筆画は早く書くと露峰の要素が大きく増して、書写の速度は速く、筆画は生き生きとし、筆画の間の内部関連もより緊密になった。

書法上では、基本筆画の書写芸術に何を求めているであろうか。数千年の間、究めてきたのは「永字八法」であるが、文字に対する基本筆画は完全に違う概念であり、名称も異なっている。点は側、横画は勒、縦画は努、勾は趯、撇(左払い)は掠、短い左払いは啄、捺(右払い)は磔と称する。永字八法は長い論説がなく、ただ八つの力、勢がある動作を筆画の名称として示しているだけである。それは純粹な書法の概念である。

3、四角い字が規範になる歷程

甲骨金文の中の多くの字は、大きさはさまざまで、筆画によって変わ

っていた。偏旁や部位の筆画が多ければ、文字は大きくなっていった。次第に整い、規則があるようになった。それは一つ大前提がある。即ち、中国語の語句は単音節であって、後に二音節の語句が多くなっても単音節の分析ができるのである。一つの音節に一つの発音と意味がある。文字と言語は一致しなければならないので、一つの音節を一つの文字に形成したのである。形成した文字は最初の頃四角くはなかった。厳密に言えば、或は狭義的な四角い文字は唐代楷書の頃によく形成されたのである。

縦勢時代

大篆と小篆、例えば石鼓文や泰山の石刻はみんな縦勢を取っていた。「群」は「君」を上、「羊」を下に書くのも縦勢時代の字形だったからである。けれども縦勢時代の前は縦勢と横勢混ざった時期も相当長かった。さらに早い時代は象形的な要素が多く、事物は横の形であれば横勢に書き、事物は縦であれば縦勢に書いていた。例えば「受」の字、上と下に二つの手を表現し、上に「爪」、下に「又」、真ん中に「舟」があつて、斜勢になってしまう。故にその後、事物の形は横でも縦でも、筆画は多くても少なくても、一律に同じ大きさの縦勢に書くようになったのは、単に字形を配置した結果であつた。「魚」の字は文字の中に殆ど縦勢を取っていたが、魚の動きは本来横勢を取るべきである。それは何故だろう。金文の幾つかの「魚」の字は我々に啓発をもたらした。金文を見れば、魚の鼻に明らかにひもが付いている。それらの魚は捕獲されて、吊るされた魚だと分かる。それらの魚は魚獵時代に既に生産された成果の魚である。(図四) このように、家畜や動物に関する字はだいたい縦勢を取っていた。例えば、「牛」、「羊」、「馬」、「豕」、それから「鳥」、「隹」

など。これらもともと捕獲されたものを指していたから、これらの字も縦勢であるのだということが理解できるだろう。「井」の字は象形文字で、金文の中ではだいたい方形であって、四本の筆画は同じ長さであった。小篆の「井」が縦勢に変わっていたのは、その頃に縦勢は既に小篆の形、構成になったからである。「器」、「罌」の二字の場合、金文の中に殆ど左に二つの「口」、右に二つの「口」と書いていたが、小篆は明確に上に二つの「口」、下に二つの「口」と書き、縦勢になった。面白いのは金文の中の幾つかの「器」の字、四つの「口」は四つの方位にあり、左右二つにも見えるが、上下二つにも見える。おそらく横勢から縦勢への移行期間であろう。「韋」の字の偏旁は舛、発音は「口」（圍）、普通に考えればその二本の違う足を口の左右に書くはずだが、今でも上下に書いている。それは縦勢を取っていた小篆時代の字形の名残である。



図四 金文の中の縦勢を取っていた「魚」の字

横勢天下

秦隸はまだ縦勢の局面であった。西漢は横勢と縦勢両方あった。そし

て東漢は漢隸の典型的な構成を形成した時代であって、完全に横勢を取るようになった。

縦勢に伸ばす筆画の多くは収まるようになった。例えば「宀」は上から下まで覆っていて、書法では「天覆」と称する。隸書の中には、「宀」の両側の下を覆う部分は次第に収縮して、点や勾になっていた。「穴」の字の偏旁は「宀」だから、同じように両側は収縮した。「冫」も「冫」を偏旁とする字も同じである。例えば「冠」、「冢」、「冒」など。「网」と「网」を偏旁とする「羅」、「罽」などの字も同様である。それと同時に、横勢の筆画と結体も大いに発展させる必要があった。隸書の横勢を発展させた最も典型的なのは「辵」と「走」の末筆である。甲骨文金文の中では、「辵」は「彳」と「止」の二字、「走」は「夭」と「止」の二字であった。「彳」、「夭」の二字はよく文字の左偏旁として用いられ、「止」はいつも文字の右下にあった。小篆になった後この二字はようやくつながって「歩く」や「走る」の意を表す部首文字になった。その時、末筆はまだ短く小さい横画であって、右の字に触れないようにして、それは現在我々が足偏の末筆を書くようであった。隸書は「辵」、「走」の二字の末筆をなるべく右へ伸ばし、大いに発達させ、力と勢も強く、人々を魅了したのである。『石門頌』（図五）の中の「辵」偏の字の多くは、末筆を心ゆくまで際立たせ、無限の境地を感じさせていたのである。『石門頌』の中の「路」字は、「足」偏の末筆を「辵」偏のように遠く各字の右下まで伸ばしたが、他のところでは「足」偏の末筆はずっと十分に発揮されていなかった。『曹全碑』の中の「起」の字、「走」偏の末筆も伸ばされず、「己」の字の末筆を右へ伸ばした。これは篆書の書き方を保持したもので、後、楷書の中では使わなくなり、偶に草書に見られる。これと似たものに他に「毛」、「是」、「瓜」、「尢」、「元」、「兎」、「堯」、「鬼」、「虎」などの字がある。これらの字は左偏旁として用いられる時も、末筆はなるべく伸ばしている。



図五 『石門頌』

隸書は横勢を発展させるのに様々な方法をとった。上述したのは字形を変えて、筆画を転換した例である。しかしこれは普遍的なものにはならなかった。隸書が漢字にもたらした変革は十分に大きかった。また隸書は文字の安定性も維持し守らなければならなかった。そのため、多くの縦勢の字形は変わらなかった。例えば、「群」字は「君」を上、「羊」を下に書くままであった。『曹全碑』(図六)にその一例がある。「襄」、「翼」などの字も縦勢を保ったままである。隸書が横勢を発展させた最も主要な方法は、上下空間を圧縮し、横向きの筆画を伸ばすという方法である。隸書が初めて創り出した「蚕頭燕尾」の長い横画と右払いはとても書き心地がよく、左払いもさらに多く左へ伸ばした。



図六 『曹全碑』

篆書の縦勢と隸書の横勢を振り返って見て、それから何故楷書の字形は方正の勢を取ったかを考えると、それは偶然ではないということが分かったであろう。方正は縦横兼備の形体である。

方正の勢

楷書の方正は魏晋から始まったのである。鐘（繇）、王（羲之）の小楷を見て分かるように、必死に縦勢を圧縮するような構成はなくなり、ゆったりと自由な感じになった。『黄庭経』を例として挙げると、例えば「玉」、「生」などの字、縦横みんな思いのまま、完全に楷書の形であ

る。しかし結体縦横の字勢では、依然として明確な隸書の特徴がある。隸書時代に縦勢を保持した字を見るだけでなく、全体的に幾つかの典型的な構成を見なくてはならない。例えば、「丹田」の「田」、字形は完全に扁平である。「田」の字は縦でも横でも書けるので、方正の勢で現れるはずだが、それぞれ異なっていた。常用字の「不」、「中」、「大」などの字は、小篆では縦勢、隸書では横勢、そして『黄庭経』では横勢のままであった。また「調」、「臨」、「順」、「明」などの字は筆画が多く、楷書では方正な形体であるが、ここではまだ横勢であった。宋代の黄長睿の『東観余論』の中に、義晋から陳隋にかけての多くの習字手本を分析している。黄長睿は「習字の手本はみんな漢隸にしたがって「扁而弗橢」（つまり長い）、陳隋になると、結体は次第に方形になり、唐初に特にそういう傾向であった。ただ欧陽率更（欧陽詢）と虞永興（虞世南）は方形を長く書き、あざやかさを増やした。後の人は競って真似をしていたが、二人に全く及ばなかった。鐘、王の楷書は長く続いた。」と書いている。この分析はとても的確であり、全体的な成り行きをしっかりと見ていた。欧陽詢の『九成宮』の中にも明らかに縦勢に変わった字が幾つもある。確かに、隸の横勢から楷書の方正に至るまでは、相当長い過渡期があった。隋の智水（王羲之の七代の孫）から唐初の虞世南にかけての間もある程度の縦勢があった。欧陽詢は著しく縦勢を表現したのは行き過ぎだと、私は思う。方正の勢の成熟、そして楷書の成熟は顔、柳の時からだ、私は考える。欧、虞はただ「正」を重んじて、「方」を重んじていなかった。顔真卿こそ典型的な方形字であった。

方正の形は整っていて見た目がよく、規範としやすい。如何なる文字も規範によって整える必要がある。そして方正の形は融通性と弾力性がある。横画も縦画も書きやすく、書家たちは慣れればすぐに書けるようになり、横画と縦画を巧みに配置することができ、自由に發揮し、自身の風格を形成することもできるのである。歴史をみると分かるように、

現存している漢字の中に縦勢時代の字も、横勢時代の字も大量にある。だから、方正の勢は不動の局面になっていて、千年以上経ても変わらなかった。方正は最も自由で、柔軟性がある、理想的で、生き生きとした形体であり、筆を抑えれば文字の規則であり、筆を自由にすれば書家の限らない勢いである。以後の歴史でも、それを変える必要はないと思う。これまでの歴史を振り返ってみると、縦勢と横勢は相半ばしていたが、方正はそれらに勝る時代がさらに長い。

4、漢字の中に表現される幾つかの美学思想

まずこれらの方正の字は統一性がある、整然としていて、感覚的に美しく、縦と横は系統的である。楷書の厳格と行書の分散、両方重んじている。天下一、二と称賛されている行書の作品は、どちらも成り行きで出来た下書きであったが、非常に人々に好まれる配置的な美がある。我々の芸術の中に、よくこのようなことがある。即ち、“深く考えれば考えるほど上手にできない、あまり考えずに勢いで行ったら並はずれたいい作品ができる。”書法もそうだが、何も意識せずに書いた字は最高の域に達し、慎重に恐々として書いた字は必ず上手に書けるとは限らない。芸術創造では構想はとても大事である。言い伝えによれば、漢代の蕭何は漢宮で字を題する時、三ヶ月をかけて深く考えていた（「覃思三月」）。(題字を)書き出した後、それを見る人は数え切れないほど多かったそうである。しかし、本当に(書に)書く時、まだ相当の未知の部分があった。完全に思い通りに書けるかどうかは実際に書くまではまだ分からない。つまり、書いてみなければ分からないのである。或はこれが頓作というものであろう。

漢字は均衡性と対称性を含んでいる芸術である。書法芸術の歴史において、均衡性と対称性の芸術が最高の域に達したのは篆書だといえる。特に小篆時代である。何故なら、小篆の横画は完全な均衡性と対称性を

要求していたからである。現代でも小篆を書きたい人は、均衡性と対称性を把握する基本技能がなければ、小篆の門に入ることはできない。

多くの字は左右対称、上下対称になっている。それから他に部分的に対称になっている字も数多くある。これらの対称性がある字で構成された字は、すべて形式的な美しさがある。

篆体字の高度の均衡性と対称性は、隸書、楷書時代になると、主副の区別をするようになっていた。「讓右(右の字を大きく書く)」、「讓下(下の字を大きく書く)」によって、対称の原則はある程度壊れていて、さらに高い芸術的哲学的な境地に達したのである。しかしその一方では、そのバランス性と対称性は完全に壊されたのであろうか。それも違う。均衡性と対称性を重んじている段階を経て、不均衡と不对称になったので、均衡性の中の不均衡、対称性の中の不对称である。これは簡単な形式美から複雑な、一層高い段階の全体美になった。

篆書は曲線美に満ちている。その筆画は曲線を主とし、力と勢が溢れている。柔らかさの中に力強さがある曲線である。隸書は波勢に満ち起伏が多い。波勢は曲と直の間にある筆勢で、楷書の筆画が平直でありながら斜めになっているのは隸書の波勢からである。文字の面を見れば、筆画は「簡潔に、短く、明確に」、そして「類型化」、即ち幾つかの基本筆画を分類するという方向に発展した。書法の面を見れば、形式美の規則は芸術になっている。したがっていま現在の文字は道具と芸術を結びつけた優れたものである。

コミュニケーションツールとして、ますます規則性を増し、実用的で学びやすく、そしてわかりやすくなった。芸術としてもさらに多様で、豊かで、奥深い美になっている。芸術は長く存在しているもので、今に至っても各種各様の書体は依然として芸術的に輝いている。甲骨文鐘鼎文から摩崖碑帖まで、すべてが芸術の宝庫である。

文字は書法のために礎地を提供した。そして書法は文字を美的に昇華

し、文字の規則性と科学性を高めたのである。

(斉 冲天)

翻訳メモ：

『中国漢字文化大観』は1995年に出版された、初めて文化の観点から漢字を全面的に論述する著書である。この本は新しい見解と豊富な資料を用いて、漢字における文化的意義を論じ、漢字と農業、手工業、武器、官制、医薬、音楽、法律、天文、舞踊、詩歌、謎解き、対聯、篆刻、書道などの緊密な関連性を詳しく述べるものである。何九盈、胡双宝、胡冲天など四十名の学者、専門家によって書かれたものである。本稿は第九章（二）「漢字と書法」を翻訳したものである。

文字はコミュニケーションの手段として用いられている。それは符号的で、物質的なものである。それに対して書道は芸術であって、鑑賞できる美であり、精神的なものである。書法は文字を書写する芸術であるため、独創性と正確性の調和というものが常に必要とされている。文字の役割は思想を記録し、文化を広めることであり、普遍性と歴史の安定性を持っている。それに対して書法は筆力を重んじている。漢字を変えずに、漢字の筆画に力と勢を感じさせる。漢字をより生き生きと描き、元気や喜びを力として与え励まし、美的な感銘を感じさせるのは書法の役割である。即ち、文字と書法は本質的に異なっているが、いつも結びついてお互いがお互いを輝かせている。文字は書法のために基地を提供した。そして書法は文字を美化し、文字の規則性と科学性を高めたのである。

本稿の翻訳を通して、漢字と書道に関する理解はより深くなった。書道のことをよく「芸術の神殿」と例えられるが、正にその通りだと思ったのである。翻訳しながら、改めて漢字と書道の魅力に惹かれたのである。

本稿は樹立社による『漢字文化大観』の日本語翻訳（2023年3月以降出版見込）で筆者が担当した翻訳箇所、『漢字文化大観』の解題等を書き加えたものである。尚、本稿では字数の都合上、第一節の一部、第三節、第五節の一部の翻訳を省略した。

中華人民共和国独占禁止法

李 智基・加藤幸英 (訳)

中華人民共和国主席令116号

(2022年6月24日に、第13次全国人民代表大会常務委員会は、全国人民代表大会常務委員会第35回会議において、「全国人民代表大会常務委員会（關於修改（中華人民共和国独占禁止法）の決定）」を通過させた。当該改正法は2022年8月1日より施行される。

中華人民共和国独占禁止法

(2007年8月30日第10次全国人民代表大会常務委員会第29回会議通過、2022年6月24日第13次全国人民代表大会常務委員会第35回会議『中華人民共和国独占禁止法の決定に関する修正』に基づく)

中華人民共和国独占禁止法

目次

- 第1章 総則
- 第2章 独占協定
- 第3章 市場における支配的地位の濫用
- 第4章 企業結合
- 第5章 行政権力濫用による競争の排除、制限

第6章 独占行為の嫌疑に対する調査

第7章 法的責任

第8章 附則

第1章 総則

第1条 独占行為を予防し、阻止し、市場の公平な競争を保護し、イノベーションを促進し、経済運営の効率を高めて、消費者の利益と社会の公共利益を確保し、社会主義市場経済の健全な発展を促進するために、本法を制定する。

第2条 中華人民共和国国内の経済活動における独占行為に対して、本法を適用する。中華人民共和国国外の独占行為については、国内の市場競争に対して排除、影響が生じる場合は、本法を適用する。

第3条 本法に定める独占行為には次の各号を含むものとする。

- (1) 事業者が独占協定を締結すること。
- (2) 事業者が市場支配的地位を濫用すること。
- (3) 競争を排除、制限する効果をもたらす若しくはもたらしうる事業者を企業結合させること。

第4条 独占禁止の業務は中国共産党による指導を維持する。

国家は、市場化、法治化の原則を維持し、競争政策の基礎的地位を強化し、社会主義市場経済に相応する競争の規則を制定し、実施し、全体における規制を完全なものとし、統一的、開放的、競争的で且秩序ある市場体制の健全化を図る。

第5条 国家は、健全的で公平な競争審査制度を整備する。

行政機関と法律、法規により、公共事務を管理する権限を与えられた組織は、市場主体の経済活動に関わる規定を制定するとき、公正競争の審査を行わなければならない。

第6条 事業者は公平な競争、自発的な連合を通じ、法に基づき企業結合を実施し、事業規模を拡大し、市場競争力を向上させることができる。

第7条 市場において支配的地位を有する事業者は、市場支配的地位を濫用してはならず、競争を排除、制限してはならない。

第8条 国有経済が支配的地位を占め、国民経済の生命線と国家の安全に関連する業界及び法に基づき専業専売を行う業種に対し、国家はその事業者の合法的な事業活動を保護し、且つ事業者の事業活動及びその商品と役務の価格に対して法に基づき監督管理と調整規制を実施し、消費者の利益を守り、技術の進歩を促進する。

前項に定める業種の事業者は、法に基づき経営し、誠実に信用を守り、厳格に自制し、社会公衆の監督を受けなければならない。その支配的地位または専業専売の地位を利用して、消費者の利益に損害を与えてはならない。

第9条 事業者はデータと計算方法、技術、資本及びプラットフォームのルールによる優越性を利用して本法による禁止されている独占行為を行なってならない。

第10条 行政機関と法律、法規が権利を付与する公共事務を管理する機能を有する組織は、行政権力を濫用してはならず、競争を排除、制限

してはならない。

第11条 国家は、独占禁止制度を健全なものにし、独占の監督の力を強化し、監督管理の能力と監督管理の体制の現代化を高め、独占禁止の法の執行と司法を強化し、法に基づいて独占禁止事案を公正かつ高い効率で審理し、行政執行と司法と連携を健全化し、公平な競争秩序を維持する。

第12条 国務院は、独占禁止委員会を設立し、独占禁止業務を組織、協調、指導に責任を負わせ、次の職責を履行する。

- (1) 競争に関連する政策の立案を検討する。
- (2) 組織、調査を行い、市場の総体的な競争状況を評価し、評価報告を公表する。
- (3) 独占禁止のガイドラインを制定、公布する。
- (4) 独占禁止の行政の法律執行業務を調整する。
- (5) 国務院が定めるその他の職責。

国務院独占禁止委員会の構成と業務規則は国務院が定める。

第13条 国務院の定める独占禁止法執行業務を担当する機関は、独占禁止法の全ての執行業務に責任を負う。

国務院独占禁止法執行機関は、業務の必要に基づき、省、自治区、直轄市の人民政府の相応の機関に権利を付与することができ、本法の規定に基づき、関連の独占禁止法の執行業務の責任をもって行う。

第14条 業界協会は、業界の自制を強化しなければならず、当該業界の事業者の法に基づく競争、経営のコンプライアンスを遵守し、市場競争の秩序を守らなければならない。

第15条 本法にいう事業者とは、商品の生産、経営、またはサービスの提供に従事する個人、法人とその他の法人ではない組織を指す。

本法に言う関連市場とは、事業者が一定の期間内に特定の商品またはサービス（以下、「商品」と総称する）につき、競争を実施する商品の範囲と地域の範囲を指す。

第2章 独占協定

第16条 本法にいう独占協定とは、競争を排斥、制限する協定、決定又はその他協調行為を指す。

第17条 競争関係にある事業者が次の各号の独占協定を締結することを禁止する。

- (1) 商品価格を固定或いは変更すること。
- (2) 商品の生産量或いは販売量の制限をすること。
- (3) 販売市場或いは原材料調達市場の分割をすること。
- (4) 新技術、新設備の購入或いは新技術、新製品の制限をすること。
- (5) 結託して取引を排斥すること。
- (6) 国務院の独占禁止法執行機関が認定するその他の独占協定を締結すること。

第18条 事業者が取引の相手方と次の各号の独占協定を締結することを禁止する。

- (1) 第三者へ転売する商品の価格を固定すること。
- (2) 第三者へ転売する商品の最低価格を制限すること。
- (3) 国務院の独占禁止法執行機関が認定するその他の独占協定を締結す

ること。

前項第1号と第2号に定める協定は、事業者がその競争の排除、制限の効果を持たないことを証明することができる場合には、禁止しない。

事業者はその関係市場の市場シェアが国務院の独占禁止執行機構から規定する基準に下回ることを証明することができ、且国務院の独占禁止執行機構が規定するその他の条件を満たす場合、禁止しない。

第19条 事業者はその他の事業者を組織して独占協定を締結すること
或いはその他の事業者と独占協定の締結によって実質的な援助となるものを提供してはならない。

第20条 事業者が、締結した協定が次の各号のいずれかに該当すると証明できた場合、本法第17条、第18条第1項、第19条の規定を適用しない。

- (1) 技術改善、新製品の開発を研究するためである場合。
- (2) 製品の品質を向上し、コストを下げ、効率を高めるために、製品の規格、基準を統一する、又は専門化の分業を行なうためである場合。
- (3) 中小経営者の経営効率を高め、中小経営者の競争力を高めるためになされる場合。
- (4) エネルギーの節約、環境保護、災害の救済など社会の公共利益の実現のためのものである場合。
- (5) 不景気による販売量の深刻な減少を緩和するため、若しくは、顕著な生産過剰を緩和するためになされる場合。
- (6) 対外貿易と対外経済協力の正当な利益を保障するためになされる場合。
- (7) 法律と国務院が定めるその他の事由。

前項第1号から第5号の事由にあたり、本法第17条、第18条第1号、

第19条の規定が適用されない場合、事業者は、締結した協定が関連市場の競争を深刻に制限しないことを証明しなければならず、且つ、これにより生じた利益を消費者が享受できるようにしなければならない。

第21条 事業者団体は、当該業種の事業者を組織して本章に禁止する独占行為に従事してはならない。

第3章 市場における支配的地位の濫用

第22条 市場支配的地位を有する事業者が次に掲げる市場支配的地位を濫用する行為に従事することを禁止する。

- (1) 不公正な高価格で商品を販売する或いは不公正な低価格で商品を購入すること。
- (2) 正当な理由なく、コストを下回る価格で商品を販売すること。
- (3) 正当な理由なく、取引の相手方との取引の実施を拒絶すること。
- (4) 正当な理由なく、取引の相手方が自己とのみ取引を行なうように制限すること、或いはそれ（市場支配的地位を有する事業者）が指定する事業者とのみ取引を行なうように制限すること。
- (5) 正当な理由がなく商品を抱合せ販売、或いは取引時に、その他の不合理な取引条件を付け加えること。
- (6) 正当な理由なく、条件の同じ取引の相手方に対して、取引価格などの取引条件上、差別的待遇を行なうこと。
- (7) 国務院の独占禁止法執行機関が認定するその他の市場支配的地位を濫用する行為。

市場支配的地位を有する事業者は、データ、計算方法、技術及びプラットフォームの規則を用いて、前項に規定する市場支配的地位を濫用す

る行為に従事してならない。

本法に言う市場支配的地位とは、事業者が関連市場において商品価格、数量、或いはその他取引条件を規制できること、或いはその他事業者が関連市場へ参入することを阻害したり影響を及ぼしたりすることのできる能力を備える市場における地位を指す。

第23条 事業者が市場支配的地位を有すると認定するには、次の要素に基づかなければならない。

- (1) 当該事業者の関連市場における市場シェア、関連市場の競争状況。
- (2) 当該事業者が販売市場、或いは原材料調達市場をコントロールする能力。
- (3) 当該事業者の財力と技術的条件。
- (4) その他事業者が取引において当該事業者に依存している度合。
- (5) その他事業者が関連市場へ参入する容易性。
- (6) 事業者の市場支配的地位の認定に関連するその他の要因。

第24条 以下の事由のいずれかに該当する場合、事業者が市場支配的地位を有すると推定することができる。

- (1) 事業者の関連市場占有率が2分の1に達する場合。
- (2) 関連市場における二つの事業者の合計シェアが3分の2に達する場合。
- (3) 関連市場における3つの事業者の合計シェアが4分の3に達する場合。

前項の第2号、第3号に定める事由があたる場合、そのうち、事業者のシェアが10分の1に満たない場合には、当該事業者が市場支配的地位を有すると推定してはならない。市場支配的地位を占めると推定される事業者が、証拠をもって市場支配的地位を有していないことを証明す

ることができる場合、その市場支配的地位を認定してはならない。

第4章 企業結合

第25条 事業者の集中とは、以下の列挙する状況を指す。

- (1) 事業者の合併
- (2) 事業者が株式或いは資産を取得する方法をもって、他の事業者の支配権を取得すること。
- (3) 事業者が契約などの方法で他の事業者の支配権を取得すること、或いは他の事業者に対して決定的な影響を与えることができること。

第26条 企業の結合が国務院の定める申告基準に達する場合、事業者は、事前に国務院独占禁止法執行機関に届出をしなければならず、届出をしない場合は、企業結合を実施してはならない。

企業結合が国務院の定める申告基準を満たしていないが、事業者の集中が競争を排除または制限する効果を有し、または有する可能性があるという証拠がある場合、国務院の独占禁止法執行機関は事業者に対して申告を要求することができる。

事業者が前2項の規定による申告を行わない場合、国務院の独占禁止法執行機関は、法律に基づいて調査をしなければならない。

第27条 事業者の集中が以下に列挙する事由のいずれかに該当する場合、国務院の独占禁止法執行機関へ申請しなくてもよい。

- (1) 集中に参加する1つの事業者がその他各事業者の100分の50以上の議決権を有する株式或いは資産を有する場合。
- (2) 集中に参加する各事業者の100分の50以上の議決権を有する株式又

は資産を同一の集中に参加しない事業者が有する場合。

第28条 事業者は国務院の独占禁止法執行機関へ企業結合を申請する場合、以下に列挙する書類、資料を提出しなければならない。

- (1) 申請書。
- (2) 企業結合が市場競争に係る状況に対する影響の説明。
- (3) 企業結合に関する協定。
- (4) 企業結合に参加する事業者が会計事務所の監査を経た前会計年度の財務会計報告書。
- (5) 国務院独占禁止法執行機関が定めるその他書類、資料。

申請書には、企業結合に参加する事業者の名称、住所、事業範囲、実施を予定する企業結合の日時と国務院の独占禁止法執行機関が定めるその他事項を明記しなければならない。

第29条 事業者の提出した書類、資料に不備のあった場合、国務院の独占禁止法執行機関の定める期限内に書類、資料を補充して提出しなければならない。事業者が期日を過ぎても書類、資料を補完しない場合は、申告されていないものとみなす。

第30条 国務院の独占禁止法執行機関は、事業者が提出した本法第28条の規定に該当する書類、資料を受領した日から30日以内に、申告した事業者の集中に対する基本的な審査を実施し、更に審査を実施するかどうかの決定を行い、且つ書面をもって事業者へ通知しなければならない。事業者は、国務院の独占禁止法執行機関が決定を下す前に、集中を実施してはならない。

事業者は、国務院の独占禁止法執行機関が更なる審査を実施しない決定を下し、又は期限が過ぎても決定を下さない場合、企業結合を実施す

ることができる。

第31条 国務院の独占禁止法執行機関が更なる審査の実施を決定した場合、決定日から90日以内に審査を終えなければならず、企業結合を禁止するかどうかの決定を出し、書面で事業者へ通知しなければならない。企業結合を禁止する決定を下した場合、理由を説明しなければならない。審査期間に、企業結合を実施してはならない。

以下に列挙する状況のいずれかに該当する場合、国務院独占禁止法執行機関は、書面をもって事業者に通知し、前項に定める審査期間を延長することができる。但し最長でも、60日を過ぎてはならない。

- (1) 事業者が審査期限の延長に同意する場合。
- (2) 事業者が提出した書類、資料が正確ではないため、更に確認する必要がある場合。
- (3) 事業者が申告した後に、関連する状況に重大な変化が生じた場合。

国務院独占禁止法執行機関が、期限を過ぎても決定を下さない場合、企業結合を実施することができる。

第32条 以下に列挙する状況のいずれかに該当する場合、国務院の独占禁止法執行機関は、企業結合に関する審査期間の計算の中止を決定し、且事業者に書面をもって通知することができる。

- (1) 事業者が規定に従って書類や情報を提出しなかったことで審査を行うことができない場合。
- (2) 企業結合の審査に重大な影響をもたらす新たな事情又は事実が発生し、その事実を確かめなければ審査を行うことができない場合。
- (3) 企業結合に付け加えた制限条件に対する更なる評価が必要であり、事業者から停止を請求された場合。

審査期間は、審査期間の計算を中断する状況がなくなった日からその

計算が継続され、国務院の独占禁止法執行機関は、事業者に書面をもって通知しなければならない。

第33条 企業結合を審査する場合、以下に列挙する要素を考慮しなければならない。

- (1) 企業結合に参加する事業者の関連市場シェア及び市場に対する規制力。
- (2) 関連市場の市場集中度。
- (3) 企業結合が市場の参入、技術の進歩に与える影響。
- (4) 企業結合が消費者とその他関連の事業者に与える影響。
- (5) 企業結合が国民経済の発展に与える影響。
- (6) 国務院独占禁止法執行機関が考慮すべきと考える、市場競争に影響を与えるその他の要素。

第34条 企業結合が競争を排除、制限する効果をもたらす或いはもたす可能性がある場合、国務院の独占禁止法執行機関はその企業結合を禁止する決定を下さなければならない。但し、事業者が、当該企業結合の競争で生じる有利な影響が明らかに不利な影響を上回ることを証明することができる場合、或いは社会の公共利益に合致する場合、国務院独占禁止法執行機関は企業結合に対する禁止を与えない決定を下すことができる。

第35条 国務院の独占禁止法執行機関は、禁止されていない企業結合に対し、企業結合が競争生産に対して生み出す不利な影響を減少させる条件を付加することを決定することができる。

第36条 国務院の独占禁止法執行機関は、企業結合を禁止する決定、

或いは企業結合に対する制限性の条件を付加する決定を、速やかに社会へ公表しなければならない。

第37条 国務院反独占取締機関は、企業結合の分類・等級審査制度を改善し、国民生活などの重要分野における企業結合の審査を法律に基づいて強化し、審査の質と効率を向上させなければならない。

第38条 外資が国内企業の買収、或いはその他の方法で経営の企業結合に参加し、国家の安全に関わる場合、本法の規定に基づき企業結合を審査する以外に、更に国家の関連規定に基づいて、国家安全審査を行わなければならない。

第5章 行政権力濫用による競争の排除、制限

第39条 行政機関と法律、法規が授権した公共事務を管理する機能を有する組織は、行政権力を濫用して、組織または個人を規制し、或いは別の形で規制し、その指定する事業者が提供する商品を経営、購入、使用させてはならない。

第40条 行政機関と法律、法規が授権した公共事務を管理する機能を有する組織は、行政権力を濫用して、経営者と協力協定、覚書を結ぶなどの方法通じて、他の事業者の関連市場への参入を妨げ、或いは他の事業者に不平等な扱いを行い、競争の排除、制限をしてはならない。

第41条 行政機関と法律、法規が授権した公共事務を管理する機能を有する組織は行政権力を濫用し、以下に列挙する行為を実施し、商品の

地区間における自由な流通を妨害してはならない。

- (1) 他の地区の商品に対する差別的な料金項目を設定すること、或いは差別的な料金基準を実施すること、或いは差別的な価格を定めること。
- (2) 他の地区の商品に対して、当該地の商品と異なる技術的要求、検査基準を求めること、或いは別の地区の商品に重複検査、重複認証など差別的な技術的措置を採用し、他の地区の商品が当該地の市場に参入することを制限すること。
- (3) 別の地区の商品に対して専門の行政許可を採用し、他の地区の商品が当地の市場に参入することを制限すること。
- (4) 検問所を設置する或いはその他の手段を採用すること、他の地区の商品が参入すること、または当地の商品が出ていくことを妨害すること。
- (5) 商品が地区間で自由に流通することを妨害するその他の行為。

第42条 行政機関と法律、法規が授権した公共事務を管理する機能を有する組織は、行政権力を濫用し、差別的な資質の要求、審査・評価基準を設定し、或いは法に依らない情報を公開する等の方法により、事業者が入札応札活動に参加すること及びその他の経営活動を排斥または制限してはならない。

第43条 行政機関と法律、法規が授権した公共事務を管理する機能を有する組織は、行政権力を濫用し、当地の事業者と不平等な待遇を採用する等の方法により、他の地区の事業者が当地区での投資或いは支店機関の設置に排斥、制限、強制的或いは形を変えた強制を行なってはならない。

第44条 行政機関と法律、法規が授権した公共事務を管理する機能を

有する組織は、行政権力を濫用し、事業者が本法で定める独占行為に従事することに強制或いは形を変えた強制を行ってはならない。

第45条 行政機関と法律、法規が授権した公共事務を管理する機能を有する組織は、行政権力を濫用し、競争の排除、制限を行う内容を含む規定を制定してはならない。

第6章 独占行為の嫌疑に対する調査

第46条 独占禁止法執行機関は、法に基づいて独占行為の嫌疑に対する調査を行う。

独占行為の嫌疑に対して、如何なる組織と個人も独占禁止法執行機関へ告発する権利を有する。独占禁止法執行機関は、告発者のために秘密を守らなければならない。

告発が書面による形式で、且つ関係する事実と証拠を提供した場合、独占禁止法執行機関は必要な調査を行わなければならない。

第47条 独占禁止法執行機関が独占行為の嫌疑を調査する場合、以下に列挙する措置をとることができる。

- (1) 調査を受ける事業者の営業場所或いはその他の関連場所へ立ち入り検査を行うこと。
- (2) 調査を受ける事業者、利害関係者またはその他関係する組織或いは個人へ質問し、関係する状況の説明を求めること。
- (3) 調査を受ける事業者、利害関係者或いはその他関係する組織若しくは個人の関連の書類、協定、会計帳簿、業務書簡、電子データなどの文書、資料を検閲、複製すること。

- (4) 関連する証拠を押収すること。
- (5) 事業者の銀行口座を調査すること。

前項に定める措置を取る場合、独占禁止法執行機関の主要責任者に書面をもって報告し、許可を経なければならない。

第48条 独占禁止法執行機関が独占行為の嫌疑を調査する場合、執務する人員は2名を下回ってはならず、且つ執務証明書を提示しなければならない。

執務者が問い合わせと調査を行う場合、その調査記録を作成し、且つ被質問者、または被調査者から署名をもらわなければならない。

第49条 独占禁止法執行機関及びその業務人員は法律の執行過程で知り得た商業機密、個人のプライバシーと個人情報に関して法に基づく守秘義務を負う。

第50条 調査を受ける事業者、利害関係者或いはその他の関係組織或いは個人は、独占禁止法執行機関の法に基づく職務の履行に協力しなければならない、独占禁止法執行機関の調査を拒絶、妨害してはならない。

第51条 調査を受ける事業者、利害関係者は意見を陳述する権利を有する。独占禁止法執行機関は、調査を受ける事業者、利害関係者が提出した事実、理由と証拠に対して事実の確認を行なわなければならない。

第52条 独占禁止法執行機関は、独占行為の嫌疑に対する調査確認を行った後に、独占行為であると認める場合、法に基づいてその処分を決定しなければならない且つ社会へ公表することができる。

第53条 独占禁止法執行機関が調査する独占行為の嫌疑に対して、調査を受ける事業者が、独占禁止法執行機関が認める期限内に具体的な措置をとって当該行為による結果を解消させた場合、独占禁止法執行機関はその調査中止を決定することができる。調査中止の決定は、調査を受ける事業者が承諾した具体的な内容を明記しなければならない。

独占禁止法執行機関は調査の中止を決定する場合、事業者が承諾した状況の履行に対する監督を行なわなければならない。事業者がその承諾を履行した場合、独占禁止法執行機関は調査の終了を決定することができる。

以下に列挙する事由のいずれかに該当する場合、独占禁止法執行機関は調査を再開しなければならない。

- (1) 事業者がその承諾を履行しない場合。
- (2) 調査の中止の決定を行った根拠となる事実と重大な変化が生じた場合。
- (3) 調査の中止の決定は事業者が提供した不完全な或いは真実でない情報に基づいて行われた場合。

第54条 独占禁止法執行機関は、行政権力の濫用による競争排除・制限の疑いについて、法律に基づいて調査し、関連組織或いは個人は協力しなければならない。

第55条 事業者、行政機関及び法令により公共事務を処理する権限を与えられた組織が本法の規定に違反する疑いがある場合、独占禁止法執行機関はその法定代理人或いは責任者から事情聴取し、改善策の提出を求めることができる。

第7章 法的責任

第56条 事業者が本法の規定に違反し、独占協定を締結し、且つ実施した場合、独占禁止法執行機関は違法行為を停止するよう命じ、違法な所得を没収し、且つ前年度の売上高の100分の1以上100分の10以下の罰金に処する。締結された独占協定をまだ実施していない場合は、500万元以下の罰金に処することができる。独占協定を締結し実施していない場合、300万元以下の罰金に処することができる。事業者の法定代理人、主な責任を負う責任者及び直接的な責任者は締結した独占協定につき個人責任を負い、100万元以下の罰金に処することができる。

事業者は、その他の事業者を組織して独占協定を締結すること或いはその他の事業者のために独占協定を締結することに実質的に援助した場合、前項の規定を適用する。

事業者が自発的に独占禁止法執行機関へ独占協定に係る状況を報告し且つ重要な証拠を提供した場合、独占禁止法執行機関は当該事業者に対する処罰は軽減或いは免除を酌量することができる。

事業団体が本法の規定に違反し、当該業種の事業者を組織して独占協定を締結した場合、独占禁止法執行機関は、その改善を命じ、300万元以下の罰金に処することができる。情状が深刻な場合は、社会団体登記管理機関が法に基づき登記を抹消することができる。

第57条 事業者が本法の規定に違反し、市場支配的地位を濫用した場合、独占禁止法執行機関は違法行為の停止を命じ、違法所得を没収すること、且つ前年度の売上高の100分の1以上100分の10以下の罰金に処することができる。

第58条 事業者は、本法の規定に違反し企業結合を実施し、かつ競争

の排除、競争を制限する効果があるか或いはありうる場合、国务院の独占禁止法執行機関が企業結合の実施の停止、期限付きで株式または資産の処分、期限付きで営業の譲渡及びその他必要な措置をとって企業結合以前の状態を回復するよう命じ、前年度の売上高の100分の1以上100分の10以下の罰金に処する。競争を排除、制限する効果のない場合、500万元以下の罰金に処することができる。

第59条 本法第56条、第57条、第58条に定める罰金に対して、独占禁止法執行機関は具体的な罰金の金額を確定する時、違法行為の性質、程度と継続期間、違法行為の効果を無くす状況などの要素を考慮しなければならない。

第60条 事業者が独占行為を実施し、他人に損失をもたらした場合、法に基づき民事責任を負う。

事業者が社会の公益を害する独占的行為を実施する場合、市レベル以上の人民検察院は、法律に基づいて人民法院において民事公益訴訟を起こすことができる。

第61条 行政機関と法律、法規が授権した公共事務を管理する機能を有する組織が行政権力を濫用し、競争の排除、制限行為を実施した場合、上級機関からは是正を命じる。直接責任を負う主管人とその他直接責任者を法に基づき処分する。独占禁止法執行機関は、関連の上級機関へ法に基づく処分の意見を提出することができる。

行政機関と法律、法規が授権した公共事務を管理する機能を有する組織は是正に関する状況について上級機関と独占禁止法執行機関に書面をもって報告しなければならない。

法律、行政法規は行政機関と法律、法規が授権した公共事務を管理す

る機能を有する組織が行政権力を濫用し、競争の排除、制限行為を実施したことの処分について、別段規定のある場合は、その規定に従う。

第62条 独占禁止法執行機関が法に基づき実施する審査と調査に対して、関連資料、情報の提供を拒絶すること、或いは虚偽の資料、情報を提供すること、或いは証拠を隠匿、毀損、移動させること、または調査を拒絶、妨害することその他のことを行った場合、独占禁止法執行機関は是正を命じ、組織に対して前年度の売上高の100分の1以下の罰金に処し、前年度に売上がない或いは売上を計算することが難しい場合、50万人民元以下の罰金を処する。個人に対して50万人民元以下の罰金を処する。

第63条 本法の規定に違反し、これらの状況が特に重大であり、かつ特に悪い影響を与え、また特に重大な結果をもたらす場合、国务院の独占禁止法執行機関は、本法第56条、第57条、第58条及び第62条に規定する罰金の額の2倍以上5倍以下の割合で、具体的罰金額を確定することができる。

第64条 本法の規定に違反して行政処分を受けた事業者は、関連する法規に基づいて信用記録に記載され、公表される。

第65条 独占禁止法執行機関が本法第34条、第35条に基づき下した決定に対して不服がある場合、先に法に基づいて行政不服を申し立てることができる。行政不服の決定に不服がある場合、法に基づき行政訴訟を提起することができる。

独占禁止法執行機関が下した前項の規定以外の決定に対する不服がある場合、法に基づく行政不服の申立て或いは行政訴訟を提起することが

できる。

第66条 独占禁止法執行機関の職員がその職権を濫用し、職務を怠り、個人の利益を図るために不正行為を働き、或いは法律の執行過程で知り得た商業上の機密、個人のプライバシー及び個人情報を漏洩し、犯罪を構成した場合、法に基づき処分を与える。

第67条 この法律の規定に違反し、罪を犯した場合、法に基づいて刑事責任を追及される。

第8章 附則

第68条 事業者が知的財産権に係る法律、行政法規の規定に基づいて知的財産権を行使する行為に対しては、本法を適用しない。但し、事業者が知的財産権を濫用し、競争を排除、制限する行為には、本法を適用する。

第69条 農業生産者及び農村経済組織が農業製品の生産、加工、販売、輸送、貯蔵などの経営活動において実施する連合または協力的行為には、本法を適用しない。

第70条 本法は2008年8月1日から施行する。

Critique of a Research Study:

*Does Reading-While-Listening Enhance Students' Reading Fluency?
Preliminary Results from School Experiments in Rural Uganda*

Heather DOIRON

Abstract

This paper's purpose is to critique the article: *Does Reading-While-Listening Enhance Students' Reading Fluency? Preliminary Results from School Experiments in Rural Uganda*. The aforementioned article is based on a study which examines the value of RWL via audiobooks' impact on increasing reading fluency. The 30-day study conducted in a grade three classrooms at Hadassa Primary School in rural Mbale, Uganda, reported gains for both the control and treatment groups, with the treatment showing a higher increase.

The following paper critiques the article, *Does Reading-While-Listening Enhance Students' Reading Fluency? Preliminary Results from School Experiments in Rural Uganda* (Friedland et al., 2017). To avoid confusion, the article/study will often be referred to as Friedland et al. The framework for this critique will proceed under the following headings: scholarly importance, inquiry, literature review, research question, method, findings, and conclusion.

Scholarly Importance

Reading While Listening (RWL) or audio-assisted reading is a type of

listening support that matches spoken form with written form and helps develop auditory discrimination and word recognition (Osada, 2001; Vandergrift, 2007). From the position of an EFL teacher in Japan, when considering research which suggests that Japanese students do not often have the opportunity to use English outside of the classroom (Matsuoka & Evans, 2004; Olagboyega, 2013), RWL has several benefits. It can allow Japanese students to hear English daily, develop listening practice, and help manage the mental burden of decoding. As stated by Pierce, “learning cannot proceed without exposure and practice...the more exposure and practice, the more proficient the learner will become” (1995, p. 7). For the practitioner who sees the curriculum enrichment value of RWL, the resources, and materials found in Friedland et al., provide a source of introduction and reinforcement for RWL classroom implementation.

Inquiry

Friedland et al. draw on research, which posits that a lack of interest and incentive to read extends to students from all social backgrounds. Additionally, many students in developing countries lack the educational resources to nurture and maintain reading skills (OCED, 2012 as cited in Friedland et al., 2017). In sync with the present need to technologically enhance education, the study incorporated the RWL app, SiMBi. Research by Bird and Williams (2007), validates improved learning outcomes when using technology to facilitate listening while reading, and further supports “how the simultaneous approach of RWL strengthens memory and provides English language learners with access to proper pronunciation” (as cited in Friedland, 2017, p. 86).

Background

Friedland et al. describe Ugandan’s education system, the effects of poverty on education, the government’s commitment to increasing literacy rates, and

its intent to address groups whose literary skills suffer due to gender and race discrimination. The study also provides an extensive list of challenges that constrain the Ugandan primary education system, some of which include: teacher and student absenteeism, lack of school administrative infrastructure, lack of midday meals for pupils, and misuse of grants.

Review of Related Literature

In a three-part literature review, Friedland et al. gathered resources that bring further relevance to RWL's role in reading fluency. The study compares research by Ehri, 1992; Woodall, 2008; and Wren, 2006 (as cited in Friedland et al., 2017, p. 84) to draw on Vygotsky's zone of proximal development to explain how "audio recordings of a text [act like a mentor] to help the reader decode to achieve a higher level of reading fluency" (2017, p. 84). Section two on fluency cites two authors to explain the three essential elements of fluency and how increased fluency helps decrease decoding issues. Part three, the second longest of the literature review sections, uses only one reference as it details the importance of Dolch's Sight words as a tool for learning high-frequency English vocabulary and how the process contributes to increasing reading fluency.

The review's first section provides both comparison and contrast of RWL articles which will be helpful to the practitioner who wants to know more about RWL research and its benefits. Sections two and three lack the breadth and depth of a comprehensive literature review when considering the vital role of fluency and sight word acquisition in developing reading skills. Also, some incongruencies exist between in-text resources in the literature review and the reference section. i.e., Jong rather than De Jong, Chang (2011) is not listed in the reference section, and some authors in the reference section are not cited in the study.

Research question

The following is the research question pursued by Friedland et al.: To what extent do the reading fluency scores differ between the groups who participate in Reading While Listening (RWL) to audiobooks program and control groups after the program?

Independent and Dependent Variable

Using Words Correct Per Minute (WCPM) as a measurement device, Friedland et al. developed baseline data and conducted tests at the beginning and the end of a 30-day study. The results of post-test scores represent the dependent variable. The independent variables are the treatment and control group, which provide measurable observations through operationalizing fluency by giving the control group text only and the treatment group SiMBi.

Method***School setting, participants, and materials***

The participants included forty-six grade three students between the ages of 8–13 enrolled in Hadassa Primary School in rural Mbale, Uganda. As “the school has limited resources and limited exposure to scholastic material, including pencils” (Friedland et al., 2017, p. 85), the study provided ten iPads and 25 sets of headphones to facilitate SiMBi. SiMBi’s audio and reading material originated from the public domain and were recorded by Canadian high school student volunteers. PDF copies of the reading materials were also made available. The 30-day program, based on 10 minutes of reading per day plus time to study Dolch’s sight words, randomly divided the class into two groups. Volunteers and teachers at the Ugandan school were trained to conduct

Word Correct Per Minute (WCPM) testing.

To identify potential variables that can impact WCPM, based on Chan's work on a correlation between socioeconomic factors and reading achievement (1997, as cited in Friedland et al. 2017, p. 87), prior to the study Friedland et al. issued a questionnaire. The questions were based on student age, grade, gender, and potential variables that can impact WCPM, i.e.: how frequently they read, the last book they read, and their favorite books. The questionnaire also explored motivational characteristics and variables, including walking distance and daily nutrition.

Procedure

Step one: Test students using leveled reading selections from *Florida's Assessments for Instruction in Reading: Ongoing progress Monitoring Oral Reading Fluency (OPM)*, to determine appropriate instruction material.

Step 2 Pretest: Using OMP materials and WCPM, students read for three consecutive minutes and were timed at the end of each minute.

Step 3: Students were divided into a control and treatment group. Both groups read for ten minutes daily and studied Dolch's Sight Word lists.

Step 4 Post-test: After 30 days, both groups were tested using WCPM with the same reading passages used in the pre-test.

Limitations

The article's list of limitations included: only enough research staff to cover one school; a need for a larger sample, and WIFI issues. Also, if school fees were neglected, students were forbidden to attend class, thus resulting in absences during the study. There was also a lack of student computer experience; lack of a common technological language; and communication problems between Ugandan English speakers and the English used by the

researchers. And it seems likely this study may have encountered other communication issues. In the study's record of local languages used by the participants, the following are listed as local languages: "Mayris, Lungi, Bagiso, Ganda, Echar, and Liguse" (Friedland et al., 2107, p. 88). A quick Google search only retrieves the Friedland et al. study. In a telephone interview with Professor Vick Lukwago Ssali, a Ugandan and specialist in Ugandan ethnicity, he could only confirm "Ganda," also called "Luganda," spoken by his own tribe, the Baganda, as one of the existing local languages. Dr. Ssali noted further that "Lungi" and "Bagiso" could be a mistaken reference to "Lango" and "Lugisu" or "Lugishu," spoken, respectively, by the Langi of Northern Uganda, and the Bagisu or Bagishu of Eastern Uganda. He had no idea what "Mayris" and "Echar" could be referring to. This lack of communication raises questions about the working relationship between the study's authors and the Hadassa primary school leaders, as it seems odd that the study did not ascertain what local languages students spoke at home.

Findings

In the face of several challenges, the study found both groups increased in word count, with the treatment group showing a higher increase, thus indicating a difference between the participant's use of text only and RWL via audiobooks.

Conclusion

Friedland et al. conclude that SiMBi "is a promising tool to potentially improve both reading comprehension and fluency of the English language" (2017, p. 90). Also, the authors voice the intention to conduct further studies in North America and Uganda. The conclusion's focus on the prospects of SiMBi,

as a resource for increasing reading fluency and comprehension, aligns with Egbert and Sanden’s notion that, “a study can provide evidence for a certain pattern or outcome, [and can be the inspiration for] other studies using different methods and paradigms (or even replication studies) that might uncover different evidence” (2019, p. 92).

References

- Egbert, J., & Sanden, S. (2019). *Foundations of Education Research :Understanding theoretical components* (2nd ed.). Routledge. 10.4324/9780429452963. 2022, from <https://www.jewishindependent.ca/fostering-literacy-education/>
- Friedland, A., Gilman, M., Johnson, M., & Demeke, A. (n.d.). Does Reading-While-Listening Enhance Students' Reading Fluency? Preliminary Results from School Experiments in Rural Uganda. *Journal of Education and Practice*, 8 (7), 83–90.
- Matsuoka, R., & Evans, D. R. (2004). “Socio-cognitive Approach in Second Language Acquisition Research.” *National College of Nursing Japan*, vol. 3, no. 1, 2004, pp. 2–10
- Olagboyega, Kolawole Waziri – The Language “Noticing” Hypothesis – Towards Effective Teaching Methods in Japan. Research Report: Graduate School of Engineering and Resources Science, Akita University 2013, vol. 34 (October), pp. 29–34., from https://air.repo.nii.ac.jp/?action=repository_uri&item_id=2170&file_id...1 accessed March 24th, 2019.
- Osada, N. (2001). What strategy do less proficient learners employ in listening comprehension? A reappraisal of bottom-up and top-down processing. *Journal of the Pan-Pacific Association of Applied Linguistics*, 5, 73–90.
- Peirce, B. N. (1995). Social Identity, Investment, and Language Learning. *TESOL Quarterly*, 29 (1), 9–31. <https://doi.org/10.2307/3587803>
- Vandergrift, L. (2007). Recent developments in second and foreign language listening comprehension research. *Language Teaching*, 40 (3), 191–210. <https://doi.org/10.1017/s0261444807004338>

愛知学院大学語学研究所規程

(名称・所属)

第1条 本研究所は愛知学院大学語学研究所（以下「本研究所」という）と称し、愛知学院大学教養部に設置する。

(目的)

第2条 本研究所は建学の精神に則り、外国語の総合的研究につとめ、外国語教育の向上を目的とする。

(事業)

第3条 本研究所は下記の事業を行う。

- (1) 外国語及び外国語教育に関する組織的研究
- (2) 外国語教育活動の調査と分析
- (3) 研究成果の発表及び調査・分析の報告のための研究所報の刊行
- (4) その他設立の目的を達成するに必要な事業

(組織)

第4条 本研究所の所員は本学教養部語学担当の専任教員から成る。

(役員・任期)

第5条 本研究所に次の役員をおく。

所長1名、副所長1名、委員若干名

任期はいずれも2ヵ年とし、再任を妨げない。

(所長)

第6条 所長は、所員会議の議を経て、学長これを委嘱する。

- 2 所長は本研究所を代表し、運営全般を統括する。

(副所長)

第7条 副所長は所員会議の議を経て、所員の中から研究所長これを委嘱する。

2 副所長は所長を補佐する。

(運営委員会)

第8条 本研究所に運営委員会をおく。

2 運営委員会は、所長、副所長、委員から成り、所長は運営委員長を兼務する。運営委員会の規程は別に定める。

(所員会議)

第9条 本研究所に所員会議をおく。

2 所員会議は全所員をもって構成し、その過半数の出席をもって成立する。

3 所員会議は所長が召集し、その議長となる。但し、全所員の4分の1以上の請求があった場合、その請求より2週間以内に所長は所員会議を開催しなければならない。

(経費)

第10条 本研究所の経常費は愛知学院大学の年間予算をもってこれにあてる。

(規程の改正)

第11条 本規程の改正は、全所員の3分の2以上の賛同をえ、教養部教授会の議を経て、学長の承認をうることを要する。

附 則

本規程は、昭和50年4月1日より施行する。

本規程は、平成11年2月12日より改正施行する。

『語研紀要』投稿規定

(投稿資格)

第1条 本誌に投稿する資格をもつ者は、原則として、語学研究所所員とする。

(転載の禁止)

第2条 他の雑誌に掲載された論文・研究ノート・資料・翻訳は、これを採用しない。

(著作権)

第3条 本誌の著作権は当研究所に、個々の著作物の著作権は著者本人に帰属する。

(インターネット上の公開)

第4条 本誌はインターネット上でも公開する。

(原稿の形式)

第5条 投稿に際しては、つぎの要領にしたがって、本文・図および表を作成する。

- (1) 原稿は原則として電子媒体による入稿とし、プリントアウトを一部添付する。
- (2) 本文の前に、別紙で、つぎの3項目を、この順序で付する。
 - (i) 題名および執筆者名
 - (ii) 欧文の題名および執筆者名
 - (iii) 論文・研究ノート・資料・翻訳の区別
- (3) 原稿の欧文箇所は、手書きの場合、すべて活字体で書く。
- (4) 図は、白紙または淡青色の方眼紙を墨書し、縮尺を指定する。
- (5) 写真に、文字または印を入れるときは、直接せずに、トレーシング・ペーパーを重ねて、それに書き入れる。

(6) 原稿は、原則として、刷り上り18ページ（和文で約16,000字）以内とする。

(原稿の提出)

第6条 投稿希望者は、運営委員会の公示する提出期限までに、同委員会に提出する。締切日以降に提出された原稿は、掲載されないことがある。ただし、申込者が、所定の数に達しないか、または、それを超える場合には、同委員会がこれを調整する。

(原稿修正の制限)

第7条 投稿後の原稿の修正は、原則として、これを行わないものとする。やむをえない場合は、初校において修正し、その範囲は最小限にとどめる。大幅な修正の結果、印刷費が追加されたときは、追加費用を個人負担とすることがある。

(校正)

第8条 校正は、原則として、第2校までとし、本文については執筆者がこれに当り、表紙・奥付その他については、編集委員がこれに当る。

(抜き刷り)

第9条 抜き刷りは、論文・研究ノート・資料・翻訳各1篇につき、30部までを無料とする。これを超える分については、実費を執筆者の負担とする。

付則

1. 本規定の改正には、語学研究所所員の3分の2以上の賛成を要する。
2. 本規定は、平成3年4月12日から施行する。
3. 本規定は、平成13年4月27日に改正し、即日施行する。
4. 本規定は、平成14年5月9日に改正し、即日施行する。
5. 本規定は、平成14年10月15日に改正し、即日施行する。
6. 本規定は、平成28年11月25日に改正し、即日施行する。

申合せ事項

- ◇ 第1条の「投稿する資格をもつ者」には、運営委員会が予め審議した上で投稿を認めた非所員を含むことができる。
- ◇ 運営委員会が、非所員の投稿の可否を審議対象とするのは、以下の場合である。
 - (1) 語学研究所所員との共同執筆による投稿
 - (2) 語学研究所所員が推薦する本学教養部の外国語科目担当非常勤講師（本学非常勤講師と学外者の共同執筆も含める）の投稿
 - (3) 語学研究所の講演に基づいて作成されたものの投稿
- ◇ 上記(1)(2)(3)に該当する投稿希望者がある場合は、運営委員会を開いて投稿の可否を決定し、その投稿希望者に通知する。
- ◇ 上記(1)(2)(3)のいずれに該当する場合も抜き刷りは1篇分とする。
- ◇ 第4条に関連して、本誌は国立情報学研究所が電子化した上でインターネット上に公表し、利用者が無料で閲覧できるものとする。
- ◇ インターネット上の公開は第28巻第1号から適用する。

語学研究所 第26回講演会

日時：令和4年6月24日(金) 17時00分～19時00分

会場：日進キャンパス2号館1階 2108教室

講師：小泉 直 愛知教育大学名誉教授

演題：プロトタイプ効果と言語

語学研究所 第37回研究発表会

日時：令和4年11月25日(金) 17:00～18:30

会場：日進キャンパス2号館1階 2108教室

講師：香ノ木 隆臣 教養部教授

演題：ロバート・ペン・ウォーレンの想像力の展開とその現在における意義について

執筆者紹介（掲載順）

- 李 澤 熊 : 本学非常勤講師・韓国語担当
R. Jeffrey Blair : 本学非常勤講師・英語担当
松 岡 光 治 : 本学非常勤講師・英語担当
趙 晴 : 本学非常勤講師・中国語担当
李 智 基 : 本学非常勤講師・中国語担当
加 藤 幸 英 : 本学非常勤講師・法務支援センター
Heather Doiron : 本学外国人教師・英語担当

語学研究所 所員一覧

英語

石川 一久 (副所長)

川口 勇作

香ノ木 隆臣

近藤 浩 (所長)

佐々木 真

澤田 真由美

菅井 大地

杉浦 克哉

藤田 淳志

山下 あや

鷲嶽 正道

○Heather L. Doiron

Glenn D. Gagne

Russell L. Notestine

ドイツ語

糸井川 修 (委員)

福山 悟

中国語

勝股 高志

朱 新建

中村 綾 (委員)

フランス語

堀田 敏幸 (委員)

韓国語

文 嬉眞 (委員)

(○印は本号執筆者)

編集後記

令和4年度より、私（近藤）が語学研究所の所長を務めさせていただきこととなりました。経験不足のため、十分に円滑な運営ができていないのではないかと、不安になることもあります。それでも、今日までなんとか歩んで来ることができたのは、ひとえに、所員・運営委員の方々から賜りましたご支援のおかげです。この場を拝借し、皆様に心より感謝申し上げます。

『語研紀要』第48巻第1号をお届けします。本誌がきっかけとなり、読者の皆様に新たな興味・関心を抱いていただけるのなら、編集責任者としてそれに勝る喜びはございません。

（近藤 浩 記）

令和5年1月20日 印刷 (非売品)

令和5年1月30日 発行

愛知学院大学教養部 語学研究所 所報

語研紀要 第48巻第1号 (通巻第49号)

編集責任者 所長 近藤 浩

発行所 愛知学院大学 語学研究所
〒470-0195

愛知県日進市岩崎町阿良池12

Tel.0561-73-1111～5番

印刷所 株式会社あるむ

名古屋市中区千代田3-1-12

Tel.052-332-0861

CONTENTS

ARTICLES

A Semantic Analysis of *umareru*:
Compared with Korean Verb *taeonada*
..... Tack Ung LEE (3)

Do-It-Yourself Websites for University Teachers
..... R. Jeffrey BLAIR (31)

TRANSLATIONS

Mary Braddon, "Her Last Appearance"
..... Mitsuharu MATSUOKA (55)

Treatise on Chinese character culture (Chapter 9 (2))
..... Qi CHONGTIAN (77)

Anti-monopoly Law of the People's Republic of China
..... Tomoki RI and Yukihide KATO (101)

REVIEW

Critique of a Research Study:
Does Reading-While-Listening Enhance Students' Reading Fluency?
Preliminary Results from School Experiments in Rural Uganda
..... Heather DOIRON (123)

FOREIGN LANGUAGES & LITERATURE

Vol. 48 No. 1 (WHOLE NUMBER 49)

ARTICLES

- A Semantic Analysis of *umareru*:
Compared with Korean Verb *taeeonada*
..... Tack Ung LEE (3)
- Do-It-Yourself Websites for University Teachers
..... R. Jeffrey BLAIR (31)

TRANSLATIONS

- Mary Braddon, "Her Last Appearance"
..... Mitsuharu MATSUOKA (55)
- Treatise on Chinese character culture (Chapter 9 (2))
..... Qi CHONGTIAN (77)
- Anti-monopoly Law of the People's Republic of China
..... Tomoki RI and Yukihide KATO (101)

REVIEW

- Critique of a Research Study:
Does Reading-While-Listening Enhance Students' Reading Fluency?
Preliminary Results from School Experiments in Rural Uganda
..... Heather DOIRON (123)

Published by Foreign Languages Institute

AICHI-GAKUIN UNIVERSITY

Nagoya Japan, January 2023